

川柳の雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳の最も権威ある雑誌

麻生路郎☆主宰



七月号

No. 458

No. 458

川 雜 本社七月句会

日時 七月九日(金) 午後六時
会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停スグ東北側

兼題 「氛前」(三句) 川村好郎選

「スツケース」(三句) 友淵貴山選

「蜂」(三句) 正本水客選

「握る」(三句) 後藤梅志選

席題 三題(当日発表)

松江梅里

呈賞 ☆各題天位・各題天位から葎乃選により不朽洞賞

会費 百五十円

幹事 いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂志

清人・すすむ・薫風・柳宏子・舟遊・摩天郎

★投句だけの方は郵券五十円同封

(メ切七月八日)

「8月は川柳ゆかた会」
7月末までに
投句をお忘れなく

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雜誌社句会部

電・大阪 六〇八一

優 艶 / 清 楚 / 奇 抜
第 二 回

川 雜 川柳ゆかた会

8月8日(日)午後一時

★恒例の第二回「川雜川柳ゆかた会」は心斎橋のほとり夢の殿堂「大成閣」で華々しく開催される。盛夏の一日を冷房完備の会場で、お気楽にくつろいで、名吟を競っていただきたい。遠来のお方もお誘い合わせの上参列されたい。

日時 8月8日(日) 午後一時
会場 大成閣 電話 四五二三八

南区大宅寺中五丁目二六
心斎橋大丸北ノ辻東五〇米北側

兼題 「女難」(三句) 傍島静馬選

「朗らか」(三句) 山川阿茶選

「歴史」(三句) 河相すすむ選

「踏切」(三句) 辻圭水選

「斗志」(三句) 辻白溪子選

「特別課題「眉」」(三句) 北川春葉選

出席者も各題全部・各題句箋別紙・裏面に
雅号明記七月末日本社着便のこと

席題 当日 三題発表(各題三句)

呈賞 ★特別課題 天位にはトロフィーを贈る

★特別課題を除く各題天地位人・各題天位から葎乃選により不朽洞賞

余興 奇術 村田瓢太

落語 桂米之助

閉会の辞 本多柳志

会費 二百円

懇親宴 会費八百円(同会場において5時半から7時半までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(メ切7月末日)

▼夫人同伴歓迎・初心者歓迎▲

大阪住吉区万代西五丁目25番地
電・大阪 (671) 6081

川柳雜誌社

不朽洞句帖

麻生路郎

死はゆらく 文楽人形に死はゆらく

死の影が 紋十郎の背後うしろから

トンボリが消えゆくか

道頓堀 メロンが腐ったなげ

きなり

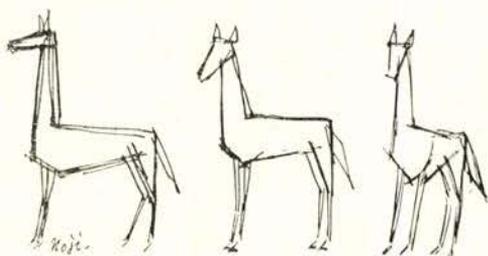
いつのほどにか ブックエンド

に似てわれも

臨終が冬ならいろいろはりおくりで

逝かんかな

雲の峯という手もあり さらばさらばです



川柳雑誌★七月号目次

★柳樽室	一路集	★柳界展望	各地柳壇	入門講座	金泥集	方円帖	近作柳樽	同舟近詠	川柳塔	不朽洞の人々	飛・燕・往・来	川柳太平記	柳志寸言	句集「孫の手」の感動	不朽洞句帖より柳話	明治川柳と風俗	特私の誕生日	集私の誕生日	短詩の着想と創作姿勢	信濃の峠	飛・燕・往・来	命拾いをした話	川傍柳初編研究(二八)	大陸江橋の梨花	不朽洞句帖	題字：麻生路郎・表紙：野尻弘	
.....	「あせる砂」	「借り着」
葎乃・宏子	菊田いさむ	戸田古方	清水白柳	麻生葎乃	北川春巢	川村好郎	麻生路郎	諸家	井蛙氏の巻	加茂正一・岩崎愛二	富士野鞍馬	本多柳志	東野大八	戸田古方	奥津啓一朗	三司・今雨・隆史・春雄・旭童・薫風・烏雀	伯峯・巳之介・没食子・九呂平	大野不真砂	石曾根民郎	月南・新子	後藤梅志	丸十府・岡田甫	川端柳風・高須啞三味・前田喜代人	東野大八	麻生路郎
(46)	(38)	(40)	(42)	(36)	(25)	(32)	(18)	(29)	(4)	(37)	(31)	(24)	(39)	(29)	(23)	(31)	(26)	(26)	(18)	(14)	(22)	(30)	(10)	(16)	(3)	

川柳塔

麻生路郎選

クーラーをつけなければ音が眠らせず
雑音の方を補聴器よく捕らえ
物忘れするが自慢の年となり

インターン制度廃止要求のデモと会う

豊中市 戸田古方

すぐ乾く涙で窓を開けている
ちと肥えてきて朝飯のうまい妻

笑いながら豹変できるいやらしき

我ながら下手な嘘だと靴をはく

楔を入れて呉れたあの人若い人

むしタオルの下ではガムをかんでいる

社長さんの通りに旅のスケジュール

高槻市 若柳潮花

日日好日還暦の祝膳

春雷が通る用地の三分咲き

よその人がいてお母ちゃん嘘をいう

ゴシップと人氣が騒ぐなかで老い

大阪市 市場没食子

奥さまの惰性が産んだ倦怠期

拙速主義と精巧遅鈍主義がもめ

質の価を下げて定紋悪るびれず

犬までがものぐさ呼べど腰上げず

兵庫 小西無鬼

風呂代が足らず手首を洗って寝る

衝突なとしやがれと思う程飛ばし

動物園へ子連れは花を見に出かけ

乗り越しと思うたと女房にからかわれ

西宮市 若本多久志

ひったくりなさいの型で持つ手提

月なかば財布は軽し小ジョッキ

大阪府 西いわを

勘違いしたか寶石店からメール

自由さが重荷になって来た孤独

分譲地俺には縁の無いチラシ

過去は死なずに繋がっていた

ご無沙汰を詫び金貸せと続くペン

ブレハブの文化住宅バス遠く

売上げの勘定 マダム常の顔

大阪市 北川春葉

五臓の疲れ手形が落ちぬ夢となり

サーピスとかや呼びびリンをチャイムにし

団体は安うて場のある土産にし

無痛分娩音楽で生まれ出る

大阪市 正本水客

降る度に生命の縮むゼロ地帯

堺市 吉田圭井堂

探索費嵩むからとて放つとけず

気違いに刃物無免許酔っ払い

鼻唄で戻りゃ危篤のウナが待ち

三倍も乗せてバスなら見逃がされ

職場から立つ候補者に天引かれ

棄権よりましと入れたが真の木偶

防府市 長野 井蛙

吹けば飛ぶような会社も誓約書

首切って置いて依頼の判をとり

親の目の甘さへ近所の目が笑い

パトロンがきたので猫は膝をおり

岡山県 直原 七面山

ただ押すだけと言うカメラ

理性など捨てて輝く娘の体

負けて勝つ秘訣が分ったら五十

会社不況二号の方も金つまり

鳥取市 河村 日満

記念日に旗もまばらな国となり

入院をした日を過去の句がおしえ

わが社のストに

前職の僕まで批判されるスト

倉敷市 田垣 方大

子の写真画鋏でとめている飯場

イエスともノーとも上役眼鏡拭く

生涯を独身という負惜しみ

三味の音どこから電話かけてるの

加賀市 野村 味平

夜更けまで飲んだアリバイ黒になり

勘定が合うて売り娘はほっとする

誘われて気乗りもせない花へ来る

米子市 小西 雄々

へそ曲りたたらぬ神にいつかさ

意地すこし曲げたいような酌を受け

ハミングで妻ご機嫌の台所

お色気を混ぜた神話の面白さ

大阪市 山川 阿茶

用事で立つとテレビの野球ホームラン

入学へ家の資産もテストされ

節食に体操一キロ減っただけ

大阪市 金井 文秋

いつ離婚するかとスター記事にされ

冬越した金魚仲間が欲しかろう

庭掃かんとしなはれ養子に見られます

買う本を決めて買わない本を読み

ゴルフ熱事業は有卦というところ

ワンマンの見本を猿に見せられる

加賀市 那谷 光郎

偏食へとうとう譲った母の根

叙勲辞退なるほどもっともごもっとも

女史の眼のおかしさ眼鏡を除った顔

まだ腐る筈ない嗅いでたべる母

隠居気にくわぬ小ボスと朝の風呂

大阪市 福井 野迷路

パパママも僕もあたしもながら族

全学連負けるな韓国ここにあり

岡山県 浜田 久米雄

番組が終ってきょうの目を閉じる

ここまでが政治で出来ている舗装

風呂代のこと政治が批判され

大阪府 清水 白柳

スタートで差が見えている資本の差

四面楚歌村正の切れ味を持つ男

お百度へシャッター切れれば振り向かれ

予備校へ行くあきらめを思いやり

曇り後晴悪女とは別れけり

出雲市 尼 緑之助

水山の一角テレビもつきつける

民放の画面に驚くのも年令か

安全月間どころか暴走日本

京都市 大鶴 喜由

拝読

生甲斐は間近く拝む御姿

上役の説にうなづいてもいれず

新時代昨日の説にこだわらず

新妻の尻くねらせて迎え呉れ

子に敗ける事も嬉しい母なれば

門真市 福島 鉄児



雨空へ抱く子背負う子手を引く子

旅費までも添えて子からの花便り

雨コートお役に立った花戻り

蛙鳴くともありけり大阪市

岡山市 服部 十九平

かあちゃんを泣かせて坊や泣きやめる

自己紹介下座の方は名だけ言い

押売りが前科二犯のことも言い

石段の十段毎に腰をのし

岡山県 田 村 藤 波

政治家も玉子の内は嘘つかず

おばあちゃんが一番好きとは嫁の知恵

お人好し妻の教訓よく守り

済みませんすみませんとて今日も無事

仏門に帰依してみても金が要り

見島市 本田 恵 二朗

道問えば街角までのご足労

蝶ネクタイ精神年齢がつけさせる

鏡台にくやし涙を見つけられ

京都市 松 川 杜 的

植物園にて(三句)

アベツクをたてれば休む処がなし

チェーリップアップに蘇てつのを撮り

長岡天神にて

ファインダー緑の配置にちと困り

鳥取市 森 本 法 泉 子

天覧の書は入院の母に見せ

春斗の闘士は人の顔でなし

冷害は私のバラ園だけでよし

堺 市 高 崎 雄 声

礼を言う口はもたない自由主義

宮仕え妾にあごで使われる

五月晴れ甲羅干してるのが目立ち

鳥取県 藤 井 明 朗

しばらくは逢えぬ別れへ散る桜

栄転の異動妻子と別居する

小鳥飼う子の早起きが続くなり

会敷市 野 田 素 身 郎

釣道具持って单身赴任をし

女学生が降りて静かなバスとなり

団地ができて魚も住まぬ川となり

デモ行進も楽し彼女と腕を組み

歌舞伎勳進帳

金剛杖丁々打つも舞の手の

人不足古い頭も駆り出され

頭から足まで春にしてデイト

篝火の桜の色も適齢期

待たされて寿司の巻き方見学し

岡山県 池 田 古 心

ナイターの時間隠居所灯も消され

鯛を釣る竹の子近所配っとき

牛飼えど牛は農耕知らず老い

大阪府 早 川 清 生

活字氾濫読む感動を子がなくし

よく頭うつ棚義父がきて作る

貴婦人の肌の黄色き夜会服

円型水槽いるかに果てのない泳ぎ

孔子胃を病みおり高遠なる思想

大阪市 西 出 一 栄

さつき晴れ去年の日傘さして出る

家内中青葉に連休狩り出され

かげろうに似たよろめきも出来ぬまま

長谷の観音牡丹の序に拝まれる

昇給の喜びを消す物価高

ストは晴れ休日雨とままならず

高校生もう人権のことにふれ

四横綱勝てばトップの記事になり

大阪市 児 島 与 呂 志

今朝も又誰か一人の学用費

恋愛結婚を信じられんと父母を見る

合理化は市電もワンマンカーの案

暴力は追いやられても息をする

肝臓を病んで割勘馬鹿らしく

大阪市 橋 高 薫 風

亀首を出す歩き初む新入社

氷雪に灯台守りの繭籠り

苑の鶯鳥のよちよち歩き卒園す

若者は髪かき上げ海見はるかす

乳房二つの春愁となり秋思となる

小出楯重展

裸婦の像わが頬にかたき無精髭

奈良県 宮 口 笛 生

四国(土佐の旅)

船足が紀伊水道を逆らわず

大歩危小歩危トンネル途切れ途切れにし

吉野川海の青さになる広さ

二度とれる田植がすんだ土佐の春

のみだおれ土佐にはうまい酒が出来

米子市 石 坂 新 雪

シヨップ制俺は自由がほしいのに

早婚の伴せあるに田を嫌い

シヨップ制先のないのもデモらせる

糸をくるだけの余生もある女

大阪市 西 川 晃

性は善されどスラムの濃雑な

人間嫌いひとりであるとしがら

掘り下げてみたが小判は出なかった

アイディアがヒョイと浮んだ店の閑

停年の過ぎたテレビをまだつかう

神戸市 仲 どん たく

駅作り道を作れば田に羽が

悪友が去って夫の低姿勢

自家用にテープも乗せて盆の僧

平田市 久 家 代 仕 男

末っ子も出稼ぎママの張りが抜け

買いどきの様に値上げをほのめかし

綺麗どこならべ汚職に名を連れ

文明が田螺たにしも棲めぬ川にする

大阪市 本 多 柳 志

又立つ気忍者の様に顔を見せ

入学式もう山岳部へ籍を置き

区役所で無職と書いているひけ目

世論などどうでも生きる椅子につき

読めそうな顔で筆勢見て廻り

出雲市 原 独 仙

女尊男卑緋鯉の上に鯉幟り

方言を乗せて出雲路のろい汽車

事勿れ主義が変らぬ平社員

岡山市 江 国 幽 谷

警官と一緒にあるきふりむかれ

祝詞またおんなし型であくびが出

歌謡曲ばかり追うてる周波数

西宮市 野 呂 鶉 汀

嫁きおくれ籠の小鳥の仲を嫉妬

水鳥の飛び立つ跡の淋しさよ

新潟市 高 野 不 二

若手歌手けなせば子供に叱られる

ストリップに行くとは言わぬ貸浴衣

ラーメンばかり喰っていきまにコマーシャル

大阪市 魚 住 満 潮

続 西成界わい

腹時計マンホールから顔を出し

五円の串かつビールを息もせず夫婦

今日の続きの明日があるだけ地下足袋を脱ぐ

百円のキッス唇とがらせる

米機撃墜さるオッサン一本つけてんか

愛媛県 村 上 旭 童

作ってる紫雲英れんげへアベック来て坐り

未亡人去年のビールだしてくれ

レンズ非情かくした筈の下駄が見え

高槻市 傍 島 静 馬



しんせいの社長にピース喫かされず

アパートに土なく老父親しめず

病人に同年輩の死が目立ち

こけし一つひとつに旅の思い出

大阪市 河井庸佑

私立校通って公立もう受けず

ご無沙汰を元気な証拠と思うとき

問題にしないでいくせに意見聞く

肩書きをとれば何でもない男

大阪府 谷沢好祐

ハイキングパパに軍靴の昔あり

会社傾いて求人欄へ眼が

月下米人の骨折り損に一級酒

青森市 工藤甲吉

大学を出ても尚且つマル送れ

千円札車掌に半ば叱られる

月よりも地球がよくて酒女

亀かなしこどもの日から紐がつき

大阪市 今西章雅

笠置山

韓信にあらねど岩をくぐり抜け

南朝を語らず巨石蝸牛に似

花かたし笠置の石を見て廻る

春闘に気をきかしてか春遅れ

迷亭氏近く

末席に在り柳人の死を悼む

京都市 室井八九寸

どじょう掬いなども踊れる日本通

夕顔へ背向け行水する尼僧

黒棒の主は委員長以下識らず

遺志によりとは養子の得手勝手

岡山県 横山一声

名勝はさびれ温泉場が栄え

後家さんになって愛想好しになり

小松市 関戸宗太郎

苗不足なら豊作と励まされ

下請をペコペコさせて係長

潰すまでやれとチョンガがまだ叫び

有料道路もつたいないがすぐに過ぎ

気軽うに附人サイン引き受ける

石川県 高山涼髪

満開がおくれ茶店はよく稼ぎ

金のない花の日曜日となりぬ

托鉢が横断歩道も鈴を振り

父から酒をとれば墓場あるのみ

うちの子にかぎってがタバコ喫うていた

行幸されし道もダンブがみなこわし

美祿市 安平次弘道

絶景へハンドルだけが必死

海の色トビも不漁だなど思い

左遷でもよしスモッグから逃れ

農地補償田植も他人事ひととなり

宇部市 平田実男

五分咲きを合格満開として眺め

子沢山嬉しい苦労がまだ続き

輪禍

嬉しさはかくしきれない試歩の足

お見舞の返し気になるほどに癒え

宇部市 平田実男

東大と親はきめてる鯉のほり

マナイタの音は誤解の解けた音

床柱辞退している顔でなし

青森県 木村凉人

娘にかける期待良妻賢母型

医は仁の名言金にしてやられ

休止符も音楽のうち無理をせず

キャベツの値紋白蝶の知らぬこと

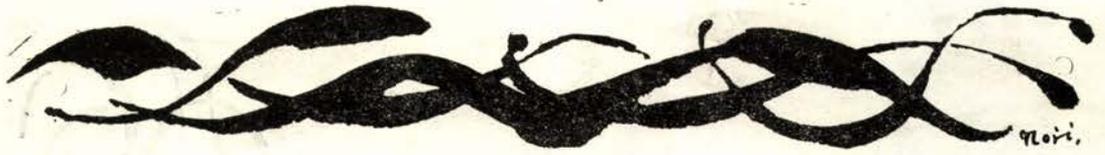
倉吉市 奥谷弘朗

両陛下を郷土にお迎えして

お車を入れて一枚撮ってくれ

お会釈を身近かに受けて身が振るえ

天皇の帽子テレビの様振られ



富田林市 岩田 美代
大家内今日の孤独がうれしくて

兵庫県 遠山 可住

隣り組やきもきさして派手な嫁
家中がパパの免許へ応援し
行き過ぎの渦に長男までとられ

兵庫県 河原みのる

支部句会当日九十才の母を葬送す(三句)

死に装束そろえ過ぎてていとしけれ
多過ぎる孫へ役付けもて余し
九十にあやかる箸も貰ろてくれ

出雲市 中川 晃男

伸びる子へ父の出費を叱られる
母の背を越す娘の髪を撫でてやり
誤字脱字テレビ見ながら書く手紙

鳥取県 清水 一保

寝てる間も人生寿命の中と知り
ライバルがもう出来て居る鯉のぼり
チョッピリとなめた程度で主婦唄い
麦の穂でさえも優秀出来不出来

松江市 柳 楽 鶴丸

山陰へ行幸啓

オラが村へも来て下さい陛下様

植樹祭陛下迎える五月晴

歓迎の中で柏手打つ老婆

京都市 都 倉求女

ハイキング驚一っぺんも聞かず去に
汗かいたしりから石楠花の風が撫で
鯉のぼりもう一日立てとこ五月晴れ
洗濯は乾かしてくれて雨

兵庫県 大江 秋月

ヌード見たとは書いてなし旅日記
家計簿へプラス愚妻の手内職
ローカルは本も読めない灯をつけて

大阪府 松田 半月

親分の勘定弟子の頭はり
進学のうちで弟淋しがり

今治市 越智 一水

蟬啼いて社務所は留守の昼下り
酒煙草婦人部長の交際費
嫁入りの道具免許もとらしとき

竹原市 山内 静水

ネクタイをゆるめた車窓にトリスおき
田舎弁まるだし大阪まで喋り
一匹が黙り野良犬みな黙る
妻叱りつけて僕にもある落度

一升瓶酔ってないのがしかと下げ

新居浜市 小林 孝正

鈍才へまだ公立と親の見栄

玉の輿が二度の勤めとなるピエロ

トルコ風呂白髪頭を忘れさせ

温泉場逃避も混って居るのなり

自由に生きたい僕へ時計がつきまとう

ここも折箱と紙屑の山觀光日本

枚方市 宮川 珠笑

ポナナスで手術する気のまままで逝き

立飲みの酒は硬貨の味がする

終電へ走る余裕を残す酔

新幹線ビールまわらぬうちに着き

京都市 西村 句楽坊

散華のようにおさつ散ってる高野山

守口市 羽原 静歩

泳がない八等身がうようよし

六・三・三 四まで行かせぬ物価高

富田林市 川端 東雲楼

私の強さよりも貧しさ師をもてず

ニコヨンの鯉は小石におどらされ

富田林市 吉岡 美房

協力は出来ない私鉄ストのピラ

協力を願い妥結は告げぬスト

もう離さないとはせりふ若すぎる



川柳初篇研究 (二八)

丸十府 高須啞三味
岡田甫 前田喜代人
川端柳風 岡崎重義
藤井和雄 清博美

344 御茶瓶を道くこぼすおくればせ

鼠弓

高須野遊びの弁当か? 「おくればせ」で、おくれたので急ぐ。それで、持参の茶がこぼれる。今のように魔法瓶などない時代、そんなこともあったであろう。

前田野掛(花見)の主人公は奥方、姫君の類。従うものは下僕。茶びんでなく「御茶瓶」であるから、こんな風景も浮かんでくる。

お茶びんのとからやかん馬に乗り

(タル四六)

よりも美しい。

岡崎いずれにしろ、茶瓶持ちが、遅れて小走りに走るの——。

藤井廿貫、ありそな野掛風景。

丸廿貫。

岡田同。供の下男は、天ビン棒の両方に重箱などをついでいるから、とかく足がおくれる。追付付こうと急ぐと、茶瓶から水がこぼれるのである。前田氏の云われる

345 ように、奥方・姫君・奥女中などの花見。女房気でくりを歩行にハこまり

五連

高須お寺の「匿し女房」が、やたらに「庫裡」から出て、そこらを歩きまわるので、和尚が「困る」という句で、

行灯へ針はよしやれと和尚いい

(タル二四)

女房気を出すと大黒目立つなり

(王柳11)

などの類句がある。当時の一風俗であった。

前田坊主の外妾を「かこわれ」「かこひ」

「かこいもの」等といった。この句、これらの通称を出していないところたくみである。「にハこまり」の言葉の響きは、類句を安定させている。

丸廿貫。

岡田同。

346 しんぞうをひや水が来て上ッる也

眠狐

高須新造女郎(十六歳から十八歳までの若い女郎)を、老人(トシヨリのひや水で「冷水」で老人をきかしたものが買ったという句で

言うなりになりなと隠居大の持て

(タル一七)

など類句はあげきれぬほどある。

前田廿貫。この句。タル一、タル六にも

あり、よく知られている。類句で、この意に近い句。

天命を知って新造買ひに行き

(タル三三)

があるが、題句の方がすぐれている。

藤井廿貫寄りを「ひや水」と云っただけのつまらぬ句。

丸廿貫。

岡田同。

347 せんべいを下駄と草履の中で焼

門柳

高須「下駄」が雨降り「草履」が晴れで「照降町」をきかせ、そこで「煎餅を焼

く」のは「翁煎餅」である。持ってまわったつまらぬ句。

照り降りにとんちやくせぬは煎餅屋

(やないばこ一三〇)

なんて句もある。

丸廿貫。

岡田同。

348 さわったらころびそふだか人を見る

龜遊

高須「さわったらころびそう」とは「触れなば落ちん」風情のこと。だが、なか／＼そうは転ばぬ。ちやんと「相手を見ている」という句である。しかし「佐渡の土ちよっとさわると転ぶなり」で、欲にはころぶのである。

前田「転び芸者。人は客である。

藤井「昔も今も変わらぬものとみえる。

丸廿貫。

岡田同。

349 ころぶ気ハなしかと簞で誘ふ也

五鳥

高須「いざさらば雪見に転ぶ所まで(芭蕉)」と、友人が簞を着て誘いに来た(表面)という句だが、家を出れば、その雪見は吉原である(裏面)人達である。「なしか」は「ないか」(ないかい)ということ。ちよっと面白い句と思うが……。

前田「ころぶ」は芸者の売色と、既に出たところ。「簞で誘ふ」がわからない。礎稿の解でよいと思うが、雷門前に簞市がひらかれるので、それを口実に、転び芸者をかいて行くのではなからうか。これは簞を

簞市の略として解したのである。岡崎「礎稿」に賛。

藤井二礎稿に半分賛。半分不安。吉原へ行くのに、蓑を着てとは、どうも解せないのて……。

清二このまゝ、雪見オンリーに考えた方がよくないかしら。

川端二長雨で退屈している所へ「芸者を買に行かないか」と誘いに来たのではないか。誘うのはどら仲間。

丸二礎稿に賛。蓑はそれほど気にすることもないであろう。いよいよ吉原へ向くとすれば、途中で何とも仕末がつくであろうから。

岡田二「雪見に行かぬか」を「ころぶ気はないか」と、芭蕉の句を利用してシャレて言ったもの。吉原まで考えぬ方よろし。(21才)

250 羽根でさずらればつかり娘居る

鼠弓

前田二解し得ない。追羽子風景か？

川端二年頃の娘が、シナを作ることに氣をとられて、十分実力を發揮できない追羽子を写生した句で、玉に当たらず、羽根ばかりかすっている、という句であろう。

なりふりにかまけ追羽子娘負け
なぶられて娘羽子板ふりあげる
と同想句と思う。

高須二「羽根でさずられる」ように、ヤンワリ手心を加えて、娘を育てる………ということ、言っただけのものと思うが。

岡田二重態の病人が、ときどき意識不明になると、昔は羽根や兎の毛などで撫でる………即ち、クスグルような一種の軽い刺激を与える、ことが行なわれた。労働の娘、もはや垂死の状態、を詠んだ句と思う。

藤井二岡田先生説で納得。死期の患者の鼻孔に羽根をあて、呼吸の有無を調べることは、今日でも行なわれている生死鑑別法である。従って、主題句は、死を待つ哀れな娘の状態を詠んだ句に間違いない。

丸二藤井国手の言われるのは、いわゆる風纏の事であろう。下学集の下に「人臨死時、以三綿纏二風二鼻穴一、知二息之絶不絶、故呼三臨終二云三風纏二是也」とあるという。昔は綿をむしって鼻先につきつけ、息の有無を検したが、現在はそれが羽毛になったのであろう。岡田先生説に教えられた。おついでに節例句を示して頂ければ、なお有難し。

岡田二藤井ドクターの付記により、私解を改める。——この句などにより、昔は垂死の病人を羽毛で撫でたのかと、莫然と考えていたが、鼻孔に羽毛を押し当て、まだ呼吸があるか、どうかを検したというのが、なるほど正しいと思う。餅屋は餅屋、やはり御職業柄、藤井さんに教えられた。丸先生御引用の足利時代の辞典「下学集」は、戦前に岩波文庫で活字化されたが、いくら古本屋を探がしても見当たらず。所が一週間ほど前、大阪の高尾書店のカタログで原本を発見、千円で入手。いま読んでいます。なお、例句は明和頃の川柳評万句合にあると思うから、そのうち見つける。

351 鯛亀の眼つ、つく松を植

魚交

前田二不解。松をどう解するのだが、それが「眼つ、つく」だから、わからぬ。喜の字屋の台の物か、とも思うが。

岡崎二その通り、喜の字屋の台の物であ

る。大きな足つきの台に、松の枝など打ちつけて飾り、いろいろの料理を配した。代金一分。その盆景を型どった料理には、尾頭つきの鯛のほかは飾りものの亀などもあったのであろう。

清二喜の字屋の台の物説に賛。主題句とは直接関係ないが、喜の字屋の句は、

きの字屋の階子の口で人はらひ

(タル一)

きの字屋にとりめの禿邪魔がられ

(タル二)

きの字屋の枯野に禿寄たかり

(タル五)

などがある。

高須二三面子先生は「婚礼の島台か」と言っているが、古句には吉原の句が圧倒的に多いので、喜の字屋の台のものがよいところであろう。

丸二贊。

岡田二料理の台の上に松を取り付けて、飾りにしたものは、吉原の仕出し料理「喜の字屋」の台の物の他に、婚礼の島台と正月料理の島台がある。亀が付いているのは婚礼の島台(三面子説)かと思うが、正月の島台にも、亀はつけたかも知れぬ。当時の絵に氣を付けて、とくと見定めたい。

352 弓せんのたづさへ備へしよって来る

門柳

前田二どうもわからぬ。最初から逐字訳でゆくと「弓せん」は弓箭(弓と矢)で、手相の上から剣難の筋という。「たづさへ」は携えて、手に物を持つこと。「備へ」は用意する、仕度しておく、敵を防ぐ手段をしておく。と一応わかるが、さて「しよっ

て来る」が、漢字で書いてないので、いろいろに考えてみて、何とも解し得ぬ。弓箭を携へぬのはしぶつかき

(タル一五)

と同じかとも思うがこれらわからぬ。

川端二弁慶を詠んだ句、ではないか？

武蔵坊水車ほどしよって出る

(タル三)

で、鎌、熊手、大槌、もじり、さすまた等、一軍の武備はとも背負って来る、と言ったものと思う。

高須二三面子先生は、この「の」が問題だと言っている。全く「弓箭の」でわからぬ。「弓箭を」なら、わからぬでもないのだが……。

丸二「弓箭の」の「の」は「を」と同じ働きをする助詞で、軍記物などに見え、謡曲にもあるかと思う。「備へ」は「供へ」で嫁いだ娘の産んだ子が、初の正月を迎えるので、実家から破魔弓、破魔矢に、お供えの餅まで持たせた、使いをよこした、という句である。

なお、前田氏引用の句は、渋柿には案山子が立て、ない、という句である。

岡田二丸先生の説、御正解。

353 人家をうごかして嫁ハあるく也

五雷

前田二この嫁、大女か、行儀の悪い女か、で、歩き方が物すごく、家鳴り震動する、というのであろう。何か他意がありそうだが、深いものはなさそうである。

岡崎二行儀の悪い嫁ではなく、美しい新嫁であろう。出歩くと、うわさを聞いている町の人達が、一目見ようと立ち騒ぐさまを

「人家を動かして」と比喻したもの。嫁を見にどつと路地へかけて出ル

(タル四)

と同想である。

清二この嫁は、婚礼当日の花嫁さんである。「人家を動かして」は、婚礼を見る野次馬の描写。

高須二清説に賛。「花嫁披露の回礼」と柳雨解あり。「人家を動かして」は大ゲサのようだが、江戸の下町は、家並が低く、たてこんでいたから、全くそんな感じがしたのであろう。

丸二嫁の回礼説に賛。

岡田二同、当時は交通もはげしくなく、ノンビリしていたから、花嫁の回礼でも、長屋絵出で見たものである。

354 にぎやかさ供部屋に蛇が五六匹

五 扇

前田二「供部屋」は、吉原の遊女屋内に主人のお供の連中が待つ部屋。「供待」とも言い、たいてい表階段下のうすぐらい所にあった。「蛇」とは、こゝで供人達が、酒でも飲みながら、おしゃべりをしてしている様子、蛇がとぐろを巻いている形にたとえたもので、左のような類句もある。

供部屋は五町の酒のうわさをし

(タル二)

供部屋に幾足いると指を折り (宮一)
供部屋の音を禿はふしぎがり

(タル一)

岡崎二六月一日の富士権現社の祭日には参詣の土産として、悪疫の侵入をふせぎ、雷除けにもなるといわれた「麦ワラの蛇」を買って帰った。その連中が大一座で吉原に

繰り込んで、にぎわった。蛇とはいふものの、これは竜をかたどったもので木の枝にまつわらせ、経木の細長く切ったものを赤く染めて舌とし、口にあたる所に差し込んであり、相当かさばったものだったので、供部屋にまとめて置いたのであろう。浅草の浅間神社は、六郷伊賀守邸の傍にあり、少し足をのばせば吉原だったので、富士詣りにことよせて、遊女買いに行った連中が多かったのである。

清二岡崎説に賛。類句を左に――。

一日は蛇の道になる衣紋坂 (タル二四)

蛇をくれた客衆と禿覚えてる (傍四)

みやげに買った蛇の舌でうそを付 (傍四)

ごまかした大蛇で女房角がはへ (傍四)

(タル二四)

まわらのじやすいを女房廻スなり

(タル二二)

高須二岡崎説に脱帽。――三面子先生も同説。但し、麦ワラの蛇は、ボクの子供時分は、大森土産にあったが、そう大きなものではなかったと思う。

丸二同。自分も麦ワラの蛇は見たことがあるが、大してカサばったものではなかったと覚えてる。

岡田二今でも、駒込や浅草の富士浅間社では、この麦ワラ製の蛇を売っているが、ごく小さい。昔のは、絵で見ると、木や竹にからませてあって、一尺から二尺ぐらいあったから、かついで帰るほどだった。

355 つき合へバ四手無口な男なり

眠 狐

前田二たまりなどで、客引きする四ツ手狐の駕かきは、おべんちゃら、悪口と多弁で

あるが、個人的に交際してみると「無口な男」だというくらい軽い句。平凡。

川端二駕の中の酔客の多弁と、それに相槌を打つだけの駕かきの無口との、組合わせを詠んだ、ものではないか。

高須二句面通りの句で

はなしのうちに帰って無口なり

の同想句と思う。

丸二同。

岡田二乗っている客に酒手はずませようと、駕かきはよくしゃべるところが、つきあってみると至って無口。佳句。

356 春日野が親父ハるびすやのか、へ

泉 河

前田二「春日野」は、吉原三浦屋の抱え遊女(享保年間)で、尾張候徳川宗春が通つて、ついに身受けした、と伝えられる。

春日野がお客は名古屋山三也 (傍五)

がある。「るびすや」は、京橋通り尾張町にあった呉服店。遊女春日野の父親がその店の雇人であったとは、信じられないが、言葉のはこび、調子にはひかれる。

岡崎二ベッコウで造つた笠を冠って吉原通いをしたほどの尾張侯のことである。その遊びも派手で、遊女春日野にも奢侈を極めさせたであろう、との想像から、楼主が有卦に入っていたことを「えびすやのか、え」と比喻した、と解釈する。

清二尾張侯と尾張町をかけた句作で、春日野の親父にしてみれば「えびすやのか、え」になつたぐらいには、ふところも温まつたことだろう、という意味。

藤井二春日野は豪奢なバトロン持ちだから、その衣装を引受ける呉服店えびすやは

品質優良

先カペン

TACHIHAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙
タチカワ

大坂市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

その親爺を抱えるのは、いと易いこと、又商略上そうしたのであるまいか、と川柳子一流の考えて、こしらえた句であろう。川端二清説に賛。春日野の親父は、結局尾張藩の祿を食つた、程度のことだろう。高須二「春日野が親父」で、諸説混乱の気味がある。先ず前田・藤井・川端三氏は「遊女春日野の父親」説で、岡崎・清両氏は「春日野の抱え主三浦屋の楼主」説のようだが、ボクは前説に賛成する。丸二大身のひいきで春日野もミイリが多く、自然その父親にも余徳が及んで、ホクホクもの、まるで恵比寿様の抱えのようだと、そのえびす顔をシヤレたもので、私も前説をとる。岡田二同。結局春日野は落籍されて、幸福な生涯を送つたのだから、その父親説が正しい。

357 こん夜やらすハあたけ出しそふな婆々

菅江

前田II「やらすハ」は、祝儀(チップ)をやらなければ。「あたけ」は、節度がなく乱暴すること。「婆々」は遺手。で、句意はあきらか。ヤリテババアは、意地悪で慾深いとされているので、それを詠んだ句は多いが、この句「あたけちらす」でなくて「あたけ出しそうな」が面白い。既出

244 金時を産ミそふなのへ老分やり

(14ウ) 一甫

と同様、遺手という言葉を出していないのがミンであるが、主題句の方がすぐれている。

岡崎II貴。三会目の遺手婆である。

高須IIそうだろう、と一応うなずけるが

「今夜やらすば」という言い方が、いや。

「今夜」ときったところ、遊んで来た亭主に、女房がブンとして「私だって女だよ」と言っている景、と見るのはいかが?

丸II三会目の遺手、でよい。

岡田II同。三会目の登楼には、女郎に床花をやり、遺手婆には一分のチップをやるのが、吉原の慣例であった。

358 願ほどきやら帷子に袖頭巾

眠狐

前田II「願ほどき」は神仏に立願したことがなかった後に、礼参りをすること。「帷子」は裏をつけない一重の衣服で、主として夏に着る麻の単衣(ひとえ)の称。

「袖頭巾」はおこそ頭巾。――立願後のお礼参りに行くのであろう、ひとえに頭巾の

いでたちは、夏と冬の合同でおかしいと、その変わった衣装を、面白がっている風景

である。

清II願ほどきの礼参りには、帷子に袖頭巾をつける風習があったのではないか?

川端II願かけから、お礼参りまでの日数の長さを、衣服で表現したのではなからうか?

高須II「願ほどき」とは、神仏に願いをかけて、それが叶えられたので、その願いを解いて貰うことで、昔は立願と同時に、何かを懸けたものである。――たとえば、好きな酒を止めるとか、煙草を止めるとか

「茶だち、塩だち」というのも、それを言ったものである。

それで、主題句の、軽装の帷子なのに、顔をかくす袖頭巾などを冠っているのは、人に知られたくない「願かけ」をした、ものと見たい。「やら」は「とか」などと同様の助詞だから「願解きなだろう」「願解きと見えて」ぐらいに解したい。

丸II礎稿のように、文字通り解す。礼参りの場所は、笠森あたりか。袖頭巾は、瘡毒による頭髮の脱落を、置すためである。

岡田II丸先生の説、面白し。なるほどと小生も教えられた。

(21ウ)

359 らんかんに人をならせるい、涼

五鳥

前田II「らんかん」は「欄干」で「てすり」のこと。この句では、橋のらんかんであろう。橋のらんかんに、涼みのため人が

沢山よりか、っている風景である。それが見事なので「ならせる、い、涼み」と言ったまでで、涼しい川風が吹いて、夕涼みも

楽しい。

高須II橋のランカンに人が「なる」ほど列

んでいるのは、下の「屋形船」のデラックス納涼を、うらやましく見ているのである。すなわち「い、涼み」は下の河の中なのである。

屋形から人と思わぬ橋の上 (タル二)

と、下から上を詠んだ句もあるが、いずれも橋上の庶民は、軽視されている。

丸II高須説よろし。「ならせる」に意味がある。

岡田II同。屋形船から、賑やかな三味などが聞こえるからである。

藤井IIうっかりして「橋下照覧」を忘れていた。一同高須さんに脱帽!

川傍柳初篇研究訂正

▼四五七号

10頁上段4行目

// 義果が // ハ // 義家が //

// 上段21行目

// 春人 // 式人 //

// 春人 // 式人 //

// 下段1行目

// 踊子。(今の芸者) // ハ //

// 踊子(今の芸者) // //

11頁三段29行目

// 「もてたやつ」理屈 // ハ //

// 「もてたやつ」理屈 // //

// 下段18行目

// (20才) // ハ // (20才) //

13頁三段19行目

// 町女房を // ハ // 町女房と //

バック・ミラー

酒井恒世

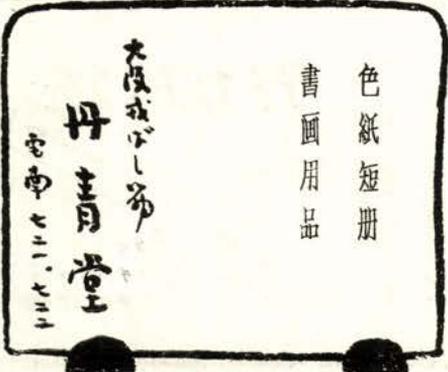
新春号17頁上段

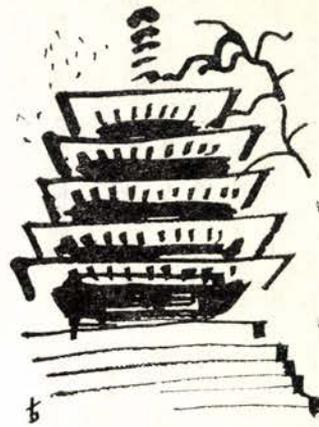
269 口をすほめてひらく物やっこり

(16才) 門柳

は、にはか雨で借りた傘には賛成だが、「口をすほめて」は「やっ」と借り」にかかると修飾語ではなく、「口をすほめてひらく物」と一つづきで、破れ傘を表現した物と思う。おんほろ傘だから、普通に差したのでは(すなわち全開の形では)穴や破れたところから雨がどんどん入るので、半開きの状態で、(というより)傘に頭を突っ込んだような形でしか使えないわけだ。それを「口をすほめてひらく」と表現した物と思う。広重の「名所江戸百景」中の「大橋あたりの夕立」の図の、手前の女二人のうち右側の女の傘の状態が、それである。

(「近世庶民文化」第9十三号より抜粋)





信濃の峠

石曾根民郎

どこの郷国でもそうだが、県人会というものがあって、同じ出身

者が集まり、相協力し合い、相励まし合う。一応むずかしい議事がすむと和気藹々、県民歌なるものを合唱する。長野県には「信濃の国」というのがある。浅井列作詞北村季晴作曲で

信濃の国は十州に
境つらぬる国にして
聳える山はいや高く
流れる川はいや遠し

松本伊那佐久善光寺

四つの平は肥沃の地
海こそなければ

万づ足らぬ事ぞなき
その一節である。初めにあるように、十州にめぐらされている。細長い県だ。西と東、ふたつの文化圏を結ぶ中山道が昔の街道で、

いまもそのおもかけを偲ぶハイカーが多い。

碓氷峠を越えて追分に下り、和田峠を経て下諏訪に至る。それから塩尻峠を経て塩尻へ、更に鳥居峠、いよ／＼木曾谷に入る。これが信濃の国のなかの中仙道のコースである。

碓氷峠

碓氷峠は東海道の箱根に匹敵する天下の険、長野県北佐久郡と群馬県碓氷郡との境にある峠。一三三六メートル。

信州に入るにはどこの国から入るにしてもいくつかの峠を越えなければならなかった。全部で五百の峠があるというが、一番有名なのがこの碓氷峠。むかしは徒歩か駕籠に乗るか、馬の背で越したも

のだが、その困難なことは想像に難くない。

橋を碓氷の嶺でなつかしみに
(柳多留 一二七)

神代のはなしたが、日本武尊が相模から上総に向って進まれ、海を渡るとにわかには暴風となり、なか／＼船が思うようにならない。

これを見かねた妃の弟橘媛が海神のた、りだろとうといって、自ら海中に身を投じて犠牲になった。するとさしもの波風もやっとおさまった。そののち、信濃に入り碓氷峠を通られたとき、妃のことを追慕したといういわれがある。これにも異説があるようだが、とにかく妃のおもかけを偲びながら遙か東国を望みながら「吾妻はや」と呼んで悲しまれたという。
ひなくもり碓氷の坂を

越えしだに
妹がこひしく忘れぬかも
(万葉集)

信越線は麓の横川駅から軽井沢駅まで一・二キロのところを二時間もかかった。アプト式という日本唯一のものであった。明治二十六年敷設、この七十年の歴史もまさに閉じられようとしている。碓氷新線が開通して、新鋭電気機関車が完成されたからだ。

碓氷峠を越え、そこが軽井沢。避暑地で知られたところ。軽井沢ほど信濃に入ったという強い感動を旅人に与えるところは少いだらう。けわしい溪谷から高原への激しい変化に、ほんとうの開放感をひろ／＼ともたらずからである。

白樺や落葉松に恵まれた高原。うまい空気、爽快な風、あくまで空は蒼くそして澄む。山々が果てしなくつらなり、北に浅間山の裾が眺められる。

国際観光都市として代表的な日本の避暑地だ。軽井沢を避暑地に改めた人はイギリスのシヨー宣教師である。明治十九年の春初めてこの地を訪れて、その年の夏は借家住いで暮し、翌々年二十一年に初めて別荘を建てた。これを機に宣教師や外交官がやって来た。外国人が多く、その後、小説家や学者政治家もやって来る。夏になると軽井沢の人口がぐっと増加する

のも当然である。

国際的な、しかも貴族的なモードを持つというカラーは特色があるが、近米レジャーブームに押しまわられて、バンガローが建ち、社員寮が立ち並んで時代色がまざ／＼と色濃くしている。ショートパンツの若い娘が颯爽と通り、シヤれた男がすんなりとした脚で闊歩するのである。

つゝ、まじやかに、ひっそりと暮す昔のことがいまさらになつかしまれる人たちにとっては、避暑地の本来の姿から遠くなりつゝ、ある近頃の風俗をどう思うのだろうか。

俗化という大衆化がいわゆる民主主義に適用ものなら黙って、目をつぶるより仕方がないかも知れない。

にも拘わらず、夏の軽井沢は東京にくらべ五度低い。「屋根のない病院」というくらい冷涼な大気と強い紫外線、綺麗な水、その環境は素晴らしい。

軽井沢膳の半ばへす、めに來
(柳多留拾遺二)

軽井沢が宿場として栄えていた頃、仇し女はなまめいた媚をふりまいたのである。野暮で、無難なこの土地の女であったが、その野卑のなかにエトランゼとしての郷愁も胸に置いて、妖しい夢をひと夜描き得たのであった。
江戸時代に浅間三宿といえは、

軽井沢、杵掛、追分であるが、飯盛女として公許され、殊に追分は中仙道と北国街道との分岐点に当るので、諸大名の参観交代などの交通に宿場は殷盛を極め、従って艶を競うオンナ達も脂粉を凝らしたのであった。

その追分の西はずれに茶屋本陣であった「辨形の茶屋」として親しまれた「つかるや」がある。方七間半の総二階建、平入切妻造こけら書き、出桁で二階を前に突き出し、二階壁の東手に三葉かたばみ紋を、左壁面に「辨形」と「つかるや」を黒地の上に白く盛り上げたものだ。井原西鶴の「一代好色男」巻四に

信濃路に入て、碓井峠を過、追分という所に、遊女と名付て、色のあき黒きをみがき、木賊かる山家者を、胼胝に、なをさせ、さき織の、肌刷しを、木曾の麻衣に、着替させ女郎に仕立ぬるこそあれ、都忘れて、是も爰にて面白し。この宿場のはずれ、街道が分れるあたりに石の道しるべがある。延宝七己未年三月の字が見える。延宝七年とは將軍家綱の代。キリシタン禁令の出た年頃に当るが、遊女たちのなかにはキリシタンで都を追われた娘もあったという。マリヤ観音などという石像があるのも、その名残りだということ

だ。ひたむきな祈りを胸に、異郷の地で毎日の許容を送ったひとり信徒がいた悲しい物語である。浅間山さんなぜ焼けしやんす 宿にお十六もちながら 「お十六」とは追分、杵掛、軽井沢の浅間三宿を三四九と数字化し、十六娘にたとえたもの、小諸馬子唄にある。

その浅間山は二五四メートル活火山。麓に浅間火山観測所や軽井沢測候所があって、常に地震計で観測しているから、火山活動の推移がすぐわかる。だから状況によつて登山禁止のおふれがすぐに伝達される。そういうわけで山の犠牲者もごく少い。 煙り立つ山が日本の香爐峰 (柳多留 八九)

香爐峰は白楽天の詩で有名。 遺愛寺鐘磬枕聽 香爐峰雪探簾看 これを知っていた清少納言がふと文学的なひらめきを発揮して、一條帝の皇后定子のお賞めにあずかった逸話はおくゆかしい。 浅間山の噴火の最も古い記録では「日本書紀」天武天皇紀に「十四年三月、是月灰於信濃国、草木枯焉」とある。今から千三百数十年の昔だ。最も激しかったのは天明三年七月のことで、遠く江戸の地にも降灰があったほどだった。このとき火口の北を破って紫岩が

流れ出し、いわゆる「鬼押し」を形成した。 日本アルプスのきびしき、浅間山のなだらかさを対比する人もいる。のび／＼とのどかな山のすがたである。 峯の茶屋から頂上までは約五キロ、二時間はかかる。下りは一時間程度だ。

浅間山みねのけぶりの 立ちあへず 雲場野かけてふく嵐かな (島木赤彦) きのうもきょうも静かにゆるやかな噴煙を空へ投げかけている。

和田峠

諏訪郡下諏訪町と小県郡和田村を結ぶところに和田峠がある。一五三メートル。北の和田、南の下諏訪のどちらの宿からも一二キロの上り道。峠の路はさほどけわしくはないけれど、曲りくねって旅人は喘いだものだった。 大そうな坂森のある和田峠 (柳多留 一四〇)

発掘され、考古学上からも重要なところ。スキーやグライダーで名のある霧ヶ峰は峯つづきだ。 和田峠を諏訪へ下らずに和田へ下るところに生宿がある。(うしやど) といつて、その昔、幕府の用材の木曾の松を牛に乗せて江戸に運んだものだが、この牛の宿であったところから名付けたということだ。そしてこの用材は関東平野を荒川まで進み、倉賀野あたりから舟で江戸へ持って行ったと伝えられている。そして帰りの牛には、塩を積んで中山道を引き通したものである。

和田峠を越えると下諏訪に着くが、甲州街道と中山道の落ち合うところ。温泉場である。ほとんど町つゞきの諏訪市にも温泉があるが、諏訪市のは何か観光地といった雰囲気が高い。そこへゆくと下諏訪町は宿場のおもかげが街全体ににじみ出ている。おちついた静かな街である。

そのむかし、和田峠の難路をやつと越えてやれ／＼と腰をおちつける下諏訪の湯場はたしかに楽天地であった。諏訪湖のほとり、わらじを脱いだ旅人が憩の一浴にまた人生の旅を考えながら、ひとときのやすらぎを癒やしたことがたろう。

工業の盛んな地帯であった。生糸の消長はそのま、景気に反映していたが、戦後、精密工業に一変した。そして発展の途上をまっしぐらに走っているのである。 条件もよかった。水質の良好なこと、水利の便がよいこと、乾燥性気候であること、それに製糸業の没落で労働者がそのま、包容されたこと、そういう背景に精密工業進出には鬼に金棒だった。冬はスケートで賑わう湖畔に、カメラ時計、オルゴール、マンドリン、ギターなどの工場がひしめいているのである。こゝで働く人たちの多くは信州人である。諏訪地方の人びとのすぐれた技術の天分が、いかに土地の澄んだ空気とよくマッチしたか、条件はあまりにも適い過ぎているのである。

この精密工業地帯に沿ってそれらしい諏訪湖のた、すまいがあるが、中央東線の汽車の窓から見る湖の姿は信州の湖ならではの貫祿をた、えている。海拔七五九メートル、面積十五平方キロ。八ヶ岳火山の噴出物で盆地の南方がせきとめられて出来たものであるといふ説が一般にとられているが、火口湖、陥没湖という異説もある。

記録にあらわれたものは「古事記」に「しなぬの国の州羽海(すわのうみ)」とあるのが最も古いようだ。諏訪大社はこの辺を拓い

「力餅」の看板が過ぎし日をしのばせるのである。 頂上附近には黒曜石の矢じりが

とこでひと頃まで諏訪岡谷といえはシルクの町であった。製糸

大陸放浪 (3)

江橋の梨花



東野 大八

ニヤン
 江橋は梨の花咲けり
 大井正夫の句である。

僕にとってはまさに秀吟中の秀吟
 というのであろう。

一泊している。

「貴方、なんというお名前？」
 相手はなやかな単衣香ぐわしいクーニヤン。作者にすれば相手はいとむきつけき野郎、掌櫃(ジャンクイ)であったかもしれないが、とにかく僕のころには、この句を耳にするなり、たちまち燕声楚々たる年ごろの姑娘の白き二の腕をほうふつと思ひ浮べた。「働貴姓」はこの句の場合はまさに殺し文句で、梨花の字句と相まつところにお色けのそこはかとなきムードも出てきた。僕は若く、正夫もまた多情多感の青年作家であつたはず。句の巧拙はとにかく大陸ローカル吟歌多しといえど、僕のころに今なおふくいくと鮮明に焼きついているところをみると、

この稿をつづるに当って、当の正夫大人に江橋とはいはずこなりや、とお伺いをたてたところ、つぎの如き返書がきた。
 「江橋はチチハルの南、浜州線と四平街チチハル線のクロスした所、松花江の上流、馬占山戦争の跡で、スッポンがよくとれたところの川、梨の花が咲き一望白一色、荷車で見物にいったところ」
 中国には「江橋」と名のつくところがあるところにある。そこでは念には念を入れたわけだがチチハルの江橋ときいて、は、ん、あそこだったのかと思ひ当つた。ノモンハン事変の際従軍記者で出かけた行き帰りここを通過していたのである。特に帰路ではチチハルで

一泊している。
 江橋は嫩江にかかる五つの大橋の一つ。満洲事変では嫩江鉄橋は北滿作戦中のトップを行くヒノキ舞台だった。その記憶があるだけに、僕は嫩江に注目していたものだ。今も茫乎たる北滿の大平原の朝もやに、延べ鏡の如く蒼白に光る嫩江のたたずまいを忘れることはできない。
 嫩江は広大な河床で、果てなき湿地帯でおおわれている。江橋、大興西駅のあたりは、その湿地帯は両側八キロを超えたとある。したがってこの泥土はスッポンの天国であった。黄ろい腹部に青黒い背中をもったこの気味の悪いスッポンの面つきは、忘八(ワンパ)と蔑称する中国人の憎しみにこたえるに充分だ。今なら安く仕入れ

てその筋に持ち込めば、スッポン大尺は請合いにちがいない。

江橋の戦いは、はじめ張海鵬と馬占山のナツ張り争いからはじまった。ともに北辺の緑林の大親分で、張が黒竜江省の支配者になろうと本拠の洮安から兵をくり出し洮昂線を北上しようとした。これを馬軍が北岸に構えて撃退した。江橋がその接触点だ。この戦いで北上をソ止する馬軍が嫩江の鉄橋五つのうち三つまでぶっこわした。満鉄の動脈を守る日本軍が憤って、張にかわって馬軍撃滅に乗り出した。馬の親分が万福麟で、対露貿易で軍費をふとらせた男だ。地の利と馴れた風土にスッポンなみの戦いの駆引きになれた馬軍によって、江橋付近では日本軍は百八十人の戦死傷者を出し、飛行機まで三機を失っている。時に昭和六年十一月五日のコトとある。(以上満洲事変画報)日本軍のこれは発表だから、ベトナムにおけるアメリカ側のサイゴン発AP電の如く至極内輪に見積った数だ。随って手痛い損害を出したことは疑いない。精強の日本軍もやはり現地民衆軍にはかなわない。敵はお手のものスッポン作戦でしつこく食い下つたに相違な

た神と伝えられる建御名方命、諏訪市にある。下社は下諏訪で、その妃をまつる。

諏訪の海や波も残らず

神のみ渡り今宵すらしも
 (千首和歌集)

この諏訪湖には寒波が来る日のよく晴れた明けがたに「御神渡」が起る。湖面が氷結したあと、夜の温度が急に下がるので氷が大きく収縮して真つぶたつに割れる。その裂目も氷結するが、暖かくなると膨脹し、そのために押されて氷が立ち上がる。それが数キロに及ぶのである。割目が出来てから氷が立つまで約一週間、八剣神社の氏子の渡り初めが終わると安心して通行し、スクーターも銀盤上を快く滑るのである。

諏訪の湖冬は鏡の上を行き

(柳多留一四五)

これは上社の諏訪明神が下社の妃神の許にお通いになるしるしであるという。また諏訪明神のお使いである狐の所為、でこれがあってから初めて人馬が氷上を通ることが出来るのであるという伝説もある。

おみわたりが起ると、浜の神主と氏子総代は身を浄めて拝視し、日付、方向などの記録をとって中央政府に報告する。それが古米のしきたりになっていた。この記録

い。總司令官長谷部少將、苦戦したのが浜本大佐、一番痛めつけられたのが名倉大隊とあるから、まるまる一個連隊が噛みつかれたわけである。

大井正夫も僕同様、かつての日には大陸放浪のあけくめで、茫々無惨、百転千化の生活を送ったこととに相違ない。そして挙句の果てに、ソ連の怒濤の如き南下の戦塵に押しまくられて、血と涙と憤怒、絶望の「日僑俘」を生むに至ったのである。老残のいま、彼の脳裡にいまもって去来する望郷のうたげの中に、きつと江橋の梨花も白々と地の果てに匂うが如く登場することにはちがいない。

「側貴姓」
こういつてそそりたてる大八も時にはおせつかい野郎にちがいないが——。馬占山、万福麟、張海鵬この名を思い出すたびに、ユーモラスとも、なんともたとえようもない愛着をそそりたてられる馬占山先生だが、その後には二度の因縁がつづいているのである。

昭和十九年、洛陽攻略で洛陽の近くまで攻めていった僕の部隊に、ある日タバコに加給品があった。みるとその商標が馬將軍牌で、馬占山先生が例のヒゲを垂ら

し、偉張ってそっくり返っていた。手にするは大時代の青竜刀で、背後に川がある。まぎれもなく黒竜江の流れである。チリ紙みたいな奴に二十本もくるんであるので、すぐゴワゴワになってふかすとワラ屑のいぶるような臭いがした。

馬占山が反満抗日に走ったのは、滿洲帝国は陸軍大臣のとき、日本から来た官僚上りの要人がサインを求めた。ところが緑林出身の彼は一字も書けぬ。「ならば御尊名にちなみ馬の絵でも——」

といったのが馬將軍にカチンときた。忽ち座を蹴りその足でチチハルへと走った。(面子本位の中国の方々には爾今決してめったなことを申して心証を害してはなりません。中日貿易近きが故にこのこととはなお更である)

ところが、終戦直後、現地除隊した僕が北京をウロついたとき、誘われて島兵団なるものの一味に加わった。隊長は唐映と中国語を名乗ってはいるがまぎれもなき日本人。東北のズーゾー弁で、参加して一味の連中にも馴れた頃、彼はこう僕に告白した。

「われわれの將軍は何を隠そう馬占山將軍である。日本軍の追討を脱れて山西に隠れられたが、その道ゆきのすべてを援護していったのがわが結社東天紅。すなわちその隊長はワシである。おわかりかな」

そして新聞二つ折ぐらいの大きな辞令を机の下から持ち出し、うやうやしく僕の前に下しおかれた。中国名をそこに書き、少佐に任ずる、とある。「この用紙一枚がなんと五百元もするんですよ。もちろん貴方にはタダだが……」

占山將軍である。日本軍の追討を脱れて山西に隠れられたが、その道ゆきのすべてを援護していったのがわが結社東天紅。すなわちその隊長はワシである。おわかりかな

そして新聞二つ折ぐらいの大きな辞令を机の下から持ち出し、うやうやしく僕の前に下しおかれた。中国名をそこに書き、少佐に任ずる、とある。

「この用紙一枚がなんと五百元もするんですよ。もちろん貴方にはタダだが……」

これは梨花でいうて、杏花がふさわしいであろう。春三月粉々と舞う薄モモ色の杏花を花テープとして、白せきの將軍が黒々とたれ下る二条の手端をしごきつつ立ちあらわれる。それは湯玉麟でも、張作霖でもない馬先生であるべきでアル。そうでなければ、杏花もかんじとはほころびかねるにちがいないし、彼自身も「エヘン」とセキ払いも致しかねるに相違ない。

なお、中国産の梨の実、大陸画家池辺青季が好物で、彼はコトあるごとにあのコブつき梨のカットばかりかいたが、黄土層の果実にふさわしい、それは部厚い風采と、万コクの風味をそのザラ／＼の地肌の底につねにたたえていたことだ。

江橋は梨花の花ざかり
この梨はやはり大井正夫の本舗
専売でなければ味がない。

僕は結局辞退したのである。
(この件は拙著「人間横丁」でふ
れてある)馬占山への信びよう性

俄的、貴姓
馬占山

これは梨花でいうて、杏花がふさわしいであろう。春三月粉々と舞う薄モモ色の杏花を花テープとして、白せきの將軍が黒々とたれ下る二条の手端をしごきつつ立ちあらわれる。それは湯玉麟でも、張作霖でもない馬先生であるべきでアル。そうでなければ、杏花もかんじとはほころびかねるにちがいないし、彼自身も「エヘン」とセキ払いも致しかねるに相違ない。

なお、中国産の梨の実、大陸画家池辺青季が好物で、彼はコトあるごとにあのコブつき梨のカットばかりかいたが、黄土層の果実にふさわしい、それは部厚い風采と、万コクの風味をそのザラ／＼の地肌の底につねにたたえていたことだ。

は長期気候変動の資料として冬の寒さのよいレポートになっているのである。

諏訪湖を眺めるには塩尻峠が恰好な場所にある。「木曾路名所図絵」に「嶺より諏訪の湖、遙に見る、絶景なり」一〇五三メートルで、塩尻市と岡谷市との境界。明治天皇の御野立所がある。

五月から七月にかけて毎朝、岡谷から塩尻峠へ小鳥バスが出る。愛鳥家が小鳥のさえずりを聴こうというのだ。

塩尻に見ゆる信濃の蕎麦の花
(一枝箋)

夏蕎麦の花もこの頃。
信州の峠についてはまだ語り足らぬが、いづれ稿を改めよう。
(松本・しなの川柳社主宰)

書きよい 美しい
投句用

柳 箋
一冊(五〇枚綴)三〇円
送費一冊毎に二〇円

川柳雑誌社
サービス部

清 酒
灘・魚崎
金露酒造株式会社釀



諏訪湖を眺めるには塩尻峠が恰好な場所にある。「木曾路名所図絵」に「嶺より諏訪の湖、遙に見る、絶景なり」一〇五三メートルで、塩尻市と岡谷市との境界。明治天皇の御野立所がある。

五月から七月にかけて毎朝、岡谷から塩尻峠へ小鳥バスが出る。愛鳥家が小鳥のさえずりを聴こうというのだ。

塩尻に見ゆる信濃の蕎麦の花
(一枝箋)

夏蕎麦の花もこの頃。
信州の峠についてはまだ語り足らぬが、いづれ稿を改めよう。
(松本・しなの川柳社主宰)

書きよい 美しい
投句用

柳 箋
一冊(五〇枚綴)三〇円
送費一冊毎に二〇円

川柳雑誌社
サービス部

清 酒
灘・魚崎
金露酒造株式会社釀



何想う人か煙草の消えており	大阪市	今井	章子	乗用車は買いたし屋根は洩つており	羽曳野市	桑原	喜風
診察券冬のバックに入れたまま	同	同	同	八起きする柳に雪の気で動き	同	同	同
片恋の妬心淋しく夕焼ける	同	同	同	遺言状さげて結末つけに来る	同	同	同
子燕の行く先知らず我れに似て	同	同	同	十日戎賽銭箱は樽に変え	同	同	同
黄昏の悪魔悪女になれと言う	同	同	同	乏しくとも父の遺産は売れもせず	同	同	同
女の魔性喪服が着てみまし	同	同	同	借猫のような新入り喋り出し	同	同	同
恋の翼翹える深き樹が欲しい	同	同	同	安静時待たしてすまぬ見舞客	同	同	同
着るものが縮んだような子の成長	見島市	伊丹柳瓢子	虚飾追う暮しに悔のある今宵	妻うつろ共稼ぎした頃を恋い	香川県	三井	酔夢
採用と一目でわかる顔で来る	同	同	同	親娘してお座敷小唄舞うも春	同	同	同
ハンマーで叩いて伸したい性根	同	同	同	まっすぐに見つめて好きという若さ	同	同	同
寄せ書の日の丸父の宝物	同	同	同	相性は凶気にしない新世帯	同	同	同
平でよし汚職を知らず勤めあげ	同	同	同	アルバイトあたって嫁は強うなり	同	同	同
ごみ焼の煙も春の色に溶け	同	同	同	失保とりひねもすのたりパチンコ屋	同	同	同
待ちぼうけ無情に鳴った発車ベル	同	同	同	闘病に靴いつまでも新しく	羽曳野市	吉川	肇雪
妻の名で定期に入れた退職金	松原市	守屋	万竿	二回目の沈黙嫉妬の目が燃える	同	同	同
椅子の味公職去ってなつかしみ	同	同	同	荒波を防ぐに細い父の腕	同	同	同
定年を労う妻が子等が居り	同	同	同	根性をつくる坐禅にしびれきれ	同	同	同
これからは直線であれ我が人生	同	同	同	根性というて我慾押し通し	同	同	同
鯉のぼり団地はテラス泳ぐだけ	同	同	同	実験着着て流行と縁もなく	同	同	同
連休明け話題は混んだことばかり	同	同	同	トップモード着て女工の里帰り	同	同	同
野菜高足しにもならぬ豆が出来	同	同	同				

本歌

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめもわかぬ恋もする故
どうやら曲水宴の遊び作らしい、
短歌の上句を、わずか月をすと、
変えただけでアヤメの姿を実に、
リアルに浮彫りした腕前は、俳聖
なればこそである。

秋深し隣りは何をする人ぞ

芭蕉
誰れかこゝ着ています江戸の春
はせを

昭和二十八年頃の私の句に

安香水くらしは何をするおんな

真砂

誰れかモク拾てます交又点

同

前向きの上向きの芭蕉先生のリズム
ムを借用した秘話であります。ア

タケダ薬品



激しい疲れ
神経痛
肩こり・腰痛
心臓病にも

▲アリナミンのもう!



完成に後一息の燕の巢	鳥取市 近藤 秋星	悪口を云われる程に金が出来	同
人の計を聞く日も驚啼きつづけ	同	花嫁のドライを包む晴衣裳	同
卵一つ産むのに鶏の仰山な	同	飲んだことにしても税金腹が立ち	鳥取県 鈴木村 諷子
女房に教わった通り喋って来	同	腹立ちが通ぜず一層腹が立ち	同
頭でも刈ろうか思案の浮かばぬ日	同	三人寄っても床の掛軸よう読まず	同
天皇を迎える砂丘初夏の色	同	春耕へ何をくよくよ揚雲雀	同
日雇いの何がゴールデンウィークぞ	玉野市 小谷 仙山	飲んで言う訳ではないと酔っている	同
立話すめば忙しい主婦となり	同	自己に克つ日太陽を直視する	兵庫県 常岡 孝風
海と陸手を振り合って大漁旗	同	二伸にもくどくど母の愛を書き	同
出る杭の一人や二人居てもよし	同	神の摂理信じる朝のバラ真紅	同
我が事になれば人情言うとれず	同	故里の母思う日の冷奴	同
偽りの世へ真白き百合の花	同	空襲を知らぬ少年のボーリング	同
金があるだけで命まで取られ	青山市 青山慶之助	一〇円の善意三段抜きになり	奈良市 村上 春巳
誘われてからは女は熱を上げ	同	ハネムーンもう女は強うなり	同
服装で人の値踏をする世相	同	観光税騒動大仏静かなり	同
何が腹立つか放火六十件	同	奈良版のトップ春一〇万の出入	同
ボロ口があれば養子にゆくと云う	同	風呂代の値上げ恐ろし子沢山	同
立呑みは互に明日を云わぬ人	同	煮豆までポリエチレンの時代が来	高知県 山川 勝子
退職金うまい話へかかりかけ	大洲市 堀内 曉風	入試バスかアウトか二階の灯が見えず	同
盛り場でスリつかまった人だから	同	昔なら徴兵だぞと子を叱り	同
同情が過ぎて女房少し妬き	同	台所も初夏かゴキブリ顔を出し	同
不倅せ養老院でいたわられ	同	時間待ちのつもりがパチンコよう入り	守口市 村田 瓢太

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番

ヤマの句は弟子への教作であらう。

秋風の中で乞食に拜まれる

豆 秋

現実直視しかもうつむき姿勢でなく、前向きの名吟とはこの様な句であろう。俳句になる一歩イヤ半歩手前で、ビタリと川柳として極めて居られる交叉点の句は、うつむきの句と言える。

短歌はすでに菊地寛の滅亡論を実現する如き様相でマンネリ化し、かえって無名歌人に、現代歌人の創作姿勢を見る。俳句は前衛流がまだ一般に理解されず、無季俳句として川柳分野へ迷い込んできた。俳句は前記の如く、川柳化できる。

女房を湯にやり亭主酒を飲み其の他の古句を無季俳句作者が、俳句化出来るだろうか。鎖国時代



金かけた名前のわりに出世せず	同	妻や子へ叱言も弱い失業中	同
尺貫法でなければビタリとこぬ頭	同	捨台詞残して弱身をひたかくし	同
胸も背も出すだけ出してニューモード	同	春たけなわ酔わぬ薬も買って旅	同
病人に食えぬ見舞もうれしが	同	女房にたきつけられて子へ意見	同
自家用で風切る友と距離を増し	同	オトイレに行つて祝辞のまた稽古	同
駅前の交番日誌ドラマめき	同	おみくじが吉と出た日の軽い事故	同
唾飲んで詫びる呼吸を整える	同	お人好し不平寝言に出てしまひ	同
散ることを知らぬ造花のあわれ	同	逆境のため息青い空が笑み	同
男の子二人柏餅のうまさ	同	鯉のぼり異変の春であらうが無かるうが	同
くよくよするなど若葉萌えに萌え	同	そんな事言つたか知らん二日酔	同
伴せは五十五の誕生日に母がゐる	同	インタビュードロもどろの標準語	同
聞えない振りも年頃板につき	同	夕食もインスタントなり妻のるす	同
泣きじやくり寝付いて	同	こちらから出掛けられない貸し	同
黙認の父の信頼裏切れず	同	結論は出さず酌いだり酌がれたり	同
スムーズに話題変えられ借らず去に	同	真似事という敵かな式がすみ	同
異動近し二次会へもお供して	同	粽巻く祖母は手馴れた腕を見せ	同
結論は出さずすぐに決つた飲む話	同	業桜になつて茶店も閉めたまゝ	同
寡婦になり後姿の肩が張り	同	手土産は土曜奉仕の肉にする	同
浮気して帰れと春の月白し	同	借りに来て貯める秘訣を教えられ	同
残業の妻を待つまの炯がさめ	同	本当の肩を肩屋は買わず去に	同
おみくじを見せて女になぞをかけ	同	持ち逃げをしても日本はせまいと	同

の文政の頃、川柳は多彩な着想を持って発達した。この短詩を吾々は誇つていいと思う。戦後パンパン嬢を、パン助と省略したセンスは、まことに川柳のセンスである。庶民の詩である川柳の健在を私は祈つてやまない。

飛・燕・往・来

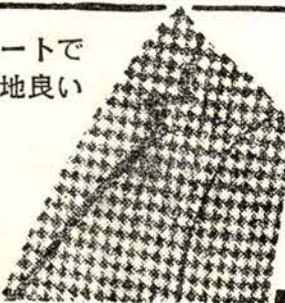
★高橋月雨氏より(神戸市)

冠省 御多用中早速雑誌五月号御送付に預り有難く拝見、大陸引揚

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

スマートで
着心地良い





さも判る顔で判らぬ個展出る 大阪市 中川 滋雀
 活版みただと代筆貰めておき 同
 汚職した奴が立派な顔で載り 同
 引越して来たが前身かくされず 青森県 岩淵 一星
 肺癌を見舞い煙草のまづい夜 同
 母の日の継母に小包拜まれる 同
 五月晴旅行の夢見て病みつゞけ 名古屋 花東千久良
 投資という宝石買った、女 同
 失恋をしてから強い気にもなり 同
 浮浪者のごろ寝を見ながら社へ通い 河内長野市 森本黒天子
 後生大事と今日も出社の古背広 同
 猫の恋春眠暁を破り 同
 ラッシュアワー老人という名に甘え 神戸市 吉田 隆史
 暴力団あばけば汚職に突っかかり 同
 同窓会あだ名ずばりの肩を抱き 鳥取県 竹内 祥二
 丹精の庭転勤へ花盛り 同
 とつ弁の仲人であって信ぜられ 石川県 三宅 ろ亭
 花嫁へ父親涙もろさ見せ 同
 世渡りはむつかし負けるパイもち 七尾市 松高 秀峰
 水鏡髪なでつけて投票場 同
 お堅いと言われただけでいまだ平 兵庫県 齊藤たけお

口だけのお世辞如才なく聞いておき 同
 ビルの窓たいくつそうな顔が浮き 松江市 岡崎 祥月
 改まれば言えず冗談では通じない 加賀市 大山 雅城
 のしかゝる重荷に駄馬の白い息 新潟県 安藤 桂仙
 オールドミスおだてて使えばおふくれ 大阪市 西本 保夫
 彼女とわかり小声になる電話 大阪市 藤富 淀月
 婦人部のリーダーおん年七十二 善通寺市 伊藤 歌子
 踏台にしたりされたり六十年 大阪市 上林 清江
 踏台にされてうれい恋女房 大阪市 田中 多幸
 出世すれば踏台忘れ勝ち 大阪市 田治 一登
 皆様のお陰を議員もう忘れ 大阪市 鈴木 生仏
 孝行のつもり不肖の子を育て 大阪市 大池 芳子
 下請も共に泣かせた親会社 大阪市 児玉 充弘
 さてとなれば妻の落付いて パオアルト 齊藤 流路
 身の程を知れと教える票の敷 笠岡市 谷本鈍愚坊
 大仏の御掌酔漢も載せ給い 茨木市 高木繁太郎
 花園を菜園に変えた野菜高 垂井市 川村 映輝
 メーデーへてれくさそうに従いてゆき 出雲市 馬路 和舟
 連休日明け仕事さっぱり捗らず 神戸市 友国 多つ
 お互と世のふみ台に満足し 大阪市 木村 久子
 スーパーで買い過ぎるも女 大阪市 富士たか子

川柳家同窓会の記事大変面白く拝読、いつに変わらぬ大八先生の才筆には感服いたしました。尚、路郎先生の病状について報道されてありますが、当分御静養肝腎とのこと気長に御加療遊され一日も早く御快癒あらんこと祈り上げます。巻頭句の

ドック入りこのボロ船をどうする気部分品がおまへんと言われそう人生を暗いところで探りあていずれも実感句として共鳴しました。……以下略

★時実新子さんより（姫路市）

一 路郎宛

御無沙汰申上げております。先生御入院の報、「川柳雑誌」で拝見しましてからずっと、お祈り致しております。赤穂の夏海へ、と先生はおっしゃいました。そのころはきつとお元氣になっていらっしやることと思いますが、今年が御無理なら又来年があります。海は逃げませんもの。では今日も心からの祈りを捧げます。

お大切に。

不朽洞句帖

より柳話



戸田古方

路郎先生がご入院のため今夕もお願を拝することができません。まことに淋しいのですが、五月芽の不朽洞句帖を拝見いたしました。ご病中とは申せ、ご健吟ぶりに勇気づけられるものでございませう。

私如きものが先生の句を云々申すことはまことにおこがましいのでございますが、先生の句を読ませていただき、私なりの受取り方をさせていただきますいと存じております。

部分品もうおまへんといわれ
そう

私、この頃時々若い人が「エエカッコスルナ」というのをききます。あんまり上品なことばではありませんが、その若い人はことばのやりとりをしてゆく間に「人間はどうせ死ぬんじやないか。」と年に似合わず悟ったようなことを申します。それはとにかく

く、「生あるものは必ず死ぬ」ものであることは間違いない。彼はそのあとで、こんなことを申しました。

「そやけど、人間は今に死なんようになるかもしれへん。部分品のとりかえができるようになる。角膜の移植やチンパンジの腎臓や……」

そして朝日ジャーナルの「人工心臓移植」の記事を見せるので

先生はこんな臓器のとりかえのこととはとくとご存知で、その上でこの句ができたのだらうと察します。

並製の部分品はあっても、先生に向くような特製の上等の部分品はそうさらにないのかもしれない。この句をそんな風にとらしていただいてはいけないうか。こんなことをいったら、それ

そ先生から「エエカッコイウナ」と叱られるかもしれません。先生今回のご入院は正にドック入りされているのだと存じております。私どもは長い間先生にご苦勞のかけっぱなしでした。このドック入りで、すこしでも静養して

いただいで、早くご丈夫になられた先生にお目にかかりたいものです。川柳は社会批判、人生批判の詩、それを通して人生陶治をすること、それが川柳のいのちである

と先生はつねづねおっしゃっています。「いのちある句」とは人々に生きるための希望と勇気をわきたたせる句にあたえられるものです。しがみつくほどのこの世でなかりけり

社会批判、人生批判は先生からうかがいました。先生の句集「旅人」のどの句にも、社会批判や人生批判が玉と光り、生き生きと踊っております。しかし、この句を読んだときはほんとにドキンとくるものがありました。

先生は偉大な「旅人」です。旅の醍醐味はその土地土地に親しくとけ込むことです。「旅人」である先生はこの世を見尽し、見極めて、この一句となったのであります。

人生の幸福は自らの値打ちを知ることから始ると申します。ソクラテスが「汝自身を知れ」といっ

たのも、孔子が「七十にして己の欲するところに従って矩をこえず」といったのも、みなそのためです。

自らを知るものは、天命を知るものです。天命を知るものこそ、天寿を許されるものです。人が眼をそむけたが地獄をみつめ得る人のみが生きながらすでに極楽のよろこびを得ているのであります。

私はこの一句の中に現在の先生を拝するように思われるのであります。

それにこの句は無技巧の技巧と申しますか、坦々として、何のかざりもありません。それでいて、内容は恐ろしいほどほんとうにふれていられるのです。

先生はお若い頃、むしゃくしゃしたら、皆、句にしてしまったとおっしゃっています。徒然草にいう「ものいわざれば肚のふくるるわざ」を地で行かれたのでしよう。一句、また一句を腹立ちを句の形で吐き出していられたのでしよう。先生の作句のご修行がそんなところからはじまったのでございませう。私もかつて、先生のまねをいたしましたことがあります。

あわれ陣笠二兎も三兎も追いつづけ

議員さんやめると電車賃がいり

めくら千人チャッチャッチャッとだまされる

頃です。作句精進をしていると、案外純粹になれるのか、自分で、今でも気に入っている句もできませんでした。その前後のことです。

青空の底の知れないのがこわし

日が暮れたら寝るんだったね
老子さま

先生の今月の句帖の中からもう一句とり上げさせていただきます。

化石の魚をわれと見し眼よ
枯れた心境です。特に注意をうながしたいのは「眼」です。十四音字詩の下七の中にある「眼」です。この「眼」を誰と見るかということ。私はこの「眼」の中に先生の句歴のすべてが盛り込まれているような気がいたのであります。

もう一言申させていただきます

この「眼」は普通の解釈では句主、先生ご自身となりましよう。しかし、私には、第三者の「眼」があるように思えてなりません。「本名、幸二郎は弱い名だが、路郎はとも強い。」

こと川柳となると一歩もゆずられない先生、他の眼に先生が「化石の魚」とうつつたこともあったでしよう。今も、そううつつているかもしれません。先生は左様な眼を乗り越え跳ね越え、今日も人間路郎樹立のために、不断の人生陶治への精進を続けていられるのです

本社六月句会にて



川柳太平記 (七)

富士野鞍馬

楠公 (下)

泣き男

北條幕府打倒までは、天皇と尊氏と同じ思いであったが、その後のは互いに反対の考えであった。則ち天皇は自ら親政を企画し、尊氏は頼朝以来の武家政治を案じ、自ら征夷大將軍に成ることであった。

建武二年(一三三五)八月、尊氏は鎌倉へ赴き、北條の残党を掃蕩して鎌倉に居たが、天皇は尊氏討伐を、新田義貞、北畠顕家に命じられた。ところが建武三年一月、逆に尊氏の大軍が京都へ入り、天皇は東坂本に避難し、ついで叡山に逃れられた。

この時正成は、坂本の陣營を守っていたが、奇計を案じ、部下の杉本佐兵衛という、泣くことが上手な男を利用して、一律院和尚に、正成は斃死したから僧となり、遺骸を葬ることをうまく頼み、婦

りに足利方の將士に会ってこのことを涙ながらに語り、新田、北畠両將も斃死したと告げあるいた。將士はこのことを尊氏に報告し、みな安心して油断したところを、

正成が不意に起って、足利勢を破った。ということが伝えられ、川柳もそれを面白く作っている。

今とむらいが出るやうに佐兵衛泣き (一五七)

目をふいて杉本佐兵衛飯につき (一一四)

一芸は左兵衛にならぶ右兵衛なし (八六一)

泣き女ならば楠まだはねる (拾五)

杉本は他家で扶助せぬ男也 (一五七)

楠はなきものにして扶持をくれ (四一六)

楠は泪の水も用にたて (八〇二〇)

楠は泣せて勝てわらって居 (八六二)

北畠顕家の軍が到着して足利軍

を追ひ、二月十日、正成は摂津の打出浜で戦い、十二日に足利軍は兵庫から軍船で九州へ向った。足の利く大將筑紫迄逃げる (五四三)

南北対立

九州へ行った尊氏は、光厳上皇から、義貞討伐の命令書をもらって、九州、四国、中国の諸勢を合した大軍で、延元元年(一三三六)五月、海陸から京都へ向って来た。これより先、新田義貞には、後醍醐天皇から、尊氏討伐の命令が下ったのである。

なぶぶたと釜のふたとでいじり合 (拾六)

鍋釜の蓋南北でたきあひ (三三三九)

と川柳にも詠まれ、足利をその家紋丸に二を釜蓋に見立て、新田の紋丸に二を釜蓋に洒落ている。尊氏の大軍を迎え討つべく、義貞は兵庫へ向ったが、正成は、この作戦会議で、

「義貞を兵庫の前線から呼び戻し、尊氏軍を京都に引き入れて、天皇は叡山へ遷幸、正成は河内に退いて、淀川口の糧道を絶ち、奇計で悩ませば、尊氏軍に脱走兵の出ることは必然である。そこで弱ったところを、義貞は叡山から、正成は河内から挟撃して討滅する」という計画を提案したが、参議藤原清忠の反対で、天皇も清忠に同意され、正成の提案は否決となった。そこで正成は決死を覚悟したのである。

桜井の別れ

「日本外史」に、

「五月十六日、弟の正季、子の正行等と、鬨を辭して西し、桜井の駅に至りぬ。正行は時に年十一なり。正成はこれを河内に遣り歸さんとし、これを誡めて曰く「汝は幼しといえどもすでに十才を過ぎたり。なおよく吾が言を記せん。今日の役は、天下の安危を決する所なり。意うに吾は汝を見ざらん。汝は吾すでに斃せりと聞かば、則ち天下は尽く足利氏に歸せんこと知るべきなり。慎んで禍福を計較し、利に向い義を忘れ、以て乃父の忠を廃することなかれ。苟くも我れの族旗にして、一人の存する者有らしめば、則ち率いて以て金剛山の旧址を守り、身を以て國に殉じ、死すること有りて他無し。汝が我れに報ずる所には、これより大なるはなし」

と。因って帝の嘗て賜いし所の宝刀を以て、これに授けて訣別す。正行は従って共に死せんことを請えり。正成これを叱して起たしむ。正行は涕を揮って去りぬ。」

と書かれ、この桜井の駅の訣別は後世美しく伝えられ、謡曲、長唄、劇にもなっている。

子をかへす宿は桜井人は武士 (八四二二)

楠の息子は桜井り (五二二二)

楠も桜で雷追ひかへし (七九二四)

立派な涙桜井で子を歸し (一六二二八)

桜井の宿から歸るいい息子 (六六二一)

桜からかへす蒼も吉野がた (八一三一)

花も実もある桜井の御遺言 (九〇四三)

吉野葛まず桜井の水が切れ (一一〇三一)

正成は冬瓜の花に実を持たせ (一一二一五)

奥方へ遺言はなし湊川 (四四)

菊水を茗へわける湊川 (七四三一)

など川柳にも多く作られてい

る。冬瓜の花は百に一つしか実にならぬという。

湊川

延元元年(一三三六)五月二十

五日、正成は手兵七百騎を率いて、湊川に陣し、足利直義の大軍に当り、血戦十六合、殆んど部下を失い、残る者わずか七十三騎となった。そこで最後を覚悟して、民家へ入り鎧を脱いでみたら、十カ所も傷をうけていた。正成は弟の正季に向って「死んでから何をしようと思うか」と言ったら、正季は「願わくば七度人間に生れ国賊を殺したい」と答え、互いに刺しちがえて死んだ。時に正成四十三才であった。なお一族十六人、家来五十余人も全部一緒に死んだのであった。元弘元年、笠置に召出されて六年目である。
うしろやくなどと正成おしがられ
(拾五二六)
四十三才は後厄の男盛りである。この外多くの湊川吟がある。湊川これぞ楠家の夢の跡
(九〇一五九九九三七)
七百騎帰らぬ水のみなと川
(九一二六)
菊水の齢も延びぬ湊川
(一三三六三〇)
みなと川菊の流れるおしい事
(二六二五)
菊水の流れ仕舞は湊川
(一〇三三五)
菊の水でも七百騎をちぢめ
(九二三六)
千早振弓矢もきかぬ湊川
(六六二)
正成の家紋菊水と菊慈童の長寿にかけた作もあり、
湊川この時はんの泣き男

金泥集

選乃葭生麻

「身の上」
 身の上を聞かんとてと妓逃げ 一栄
 身上を聞いてチツをはずんで米 同
 ホステスの身の上話まにうけて 同
 身の上をきとそれから酔わぬ酒 同
 身の上尾鰭をつける世間様 清子
 ホステスの身の上話聞き流し 同
 明日のパン過去は要らない釜ヶ崎 同
 身の上相談同じ悩みの人も居た 同
 身の上をかす異郷のひとりぼち 同
 親のない身の上誰とでも眠り 同
 公金のゆくえ身の上まず洗い 同
 ウソのある身の上かきサンガラス 同
 身にあまる榮譽の中に息をひき 千夏
 御身分がとおだて、おいて手切金 同

身の上を聞いて警官言葉変え 同
 才能も箱入りのまま一生暮れ 同
 身の上をきいて個性がうなずかれ 操子
 身の上ふれず再婚仲がよし 同
 身の上を明かせぬ事件に引っかけり 同
 終戦を境に主従逆になり 阿茶
 身の上の起伏はげしき立志伝 同
 浮き沈みない身の上をうらやまれ 同
 身の上相談離婚せよでは気に入らぬ 同
 身の上をあかして恋が又進み 同
 身の上を聞かすホステス恋に陥ち 同
 酔う程に元私とはらが出る 同
 身の上は父と呼ばれぬ日蔭者 同
 縁談に母の身の上邪魔になり 同
 身の上もあかさずスラムで巾きかせ 同
 みさ子

身の上も調べぬいたに娘は離婚 同
 職務尋問凶悪犯にとらんだ眼 同
 身の上を語るさんごの玉が落ち 同
 身の上を語り刺青見せられる 同
 甘へかゝるしぐさも過去の女 花梢
 身の上を保護されている曾根崎署 同
 身の上を聞けば仲居は笑うだけ 同
 成金の身の上戦災孤児だった 同
 似たような身の上二人を結びつけ 同
 身の上をきかれてからは気を許し 同
 身の上がどうあろうとも私嫁く 同
 身の上の話上手にお茶を入れ 同
 身の上がよすぎてつがしきませず トメ子

(六一一三) 杉本を突になかせたみなと川
(九八一六) 旗持ももらい泣する湊川
(八三七) 杉本佐兵衛が湊川までついて行ったかどうかかわからないが、川柳に作られている。
後醍醐天皇の御なげきを
山鳩の御衣をも濡らすみなど川
(一一九二〇)
吉野方花に嵐の湊川
(二〇六二)
北は晴南は曇る湊川
(七五一六)
日月の御旗もくもる湊川
(四八三四)
と詠み、天皇の御衣は山鳩色である。また、
感せぬものこそなかりけり湊川
(傍五二〇) 且つ称し且つ嗟嘆する湊川
(一八二四四) 楠の扉は朽ちぬ御家柄
(八五二五) 名木の老本かれるみなど川
(安四七二) 等々いろいろにはめていいる。
— 嗚呼忠臣 —
後、徳川光圀が、湊川の古路を訪れて「嗚呼忠臣楠子之墓」と題した石碑を建立して、正成の忠誠を讃え、弔らったので、この石碑も川柳は、
楠をくさくらぬやうにはめたまひ
(天四礼一)
御言葉の嗚呼は濁らぬ湊川
(一一一五)
嗚呼善湊に残る御言葉
(六九一〇)
楠は嗚呼の御意見石に成り
(四九二六) 木は石に武名を残す湊川
(六一八) 湊川御誉ことばも七字也
(六六三二) 楠を石になさってああとほめ
(七一五) 知恵も忠義も楠の後チは石
(八七九) 石になる木は南朝のはしら也
(七二三〇) 楠は堅い利益を世に残し
(六六三六) 楠の業武者は落ちて土になり
(四九二六) などと正成を賞讃している。
楠正成は、三忠臣の一人として、神戸の湊川神社に祀られ、明治三十年には従二位を贈られた。
孝行き親の手本を反古にせず
(六三二五) と川柳もはめていいる。

— 正行 —
正成の子正行は、父の遺志を継ぎ、後醍醐、後村上両帝に忠勤し、金剛山に廻り、京都をうかがっていたが、正平三年(一三三四)正月、吉野へ行って天皇に拝謁し、決死の覚悟を極め、如意輪堂の壁板に一族の名を列記し、かえらじとかねて思えば梓弓なき数に在る名をそとむるという歌を書いて河内に帰り、四條殿で、高師直の軍と戦い、父のように、弟正時と刺しちがえて死んだ。時に二十三才であった。その忠魂は、四條殿神社と祀られた。明治三十年には従二位を贈られた。

私の誕生日

七月は主幹の誕生日に相当いたしますので、
七月生れの柳人に次のアンケートをお願いしました。

- ① あなたの誕生日について、印象的な感想あるいは、
読物として面白いとお感じになるものをおもろし下さい。
- ② 誕生日を読んだ佳句がありましたら作者名も入れて
お知らせ下さい。

(編集局)



落ちつかぬ誕生日

東京 伊藤 瑤 天

①明治三十三年と云うと日清戦争の勝った勝ったの余韻醒めやらす日露の国交が、風雲急を告げて国内が何んとなくさわめき落ち着かぬ時に、産れたので今もって落ち着きの無いのはその精かも知れませんが。

私の若かりし頃の作品に

産ぶ声へ五本の指がちゃんとありと独身時代の想像句がありますが初孫が生れた報せの時に、一番先に頭へピンと来たのは五体が満

足で生れて呉れたのか知らと云う事でした。

新暦と旧暦

尼崎 小林 文月

①僕は日清戦争のあと、男男男女女男女の五男二女の農家の三男として七月九日に生れた。父は農村で名譽職を多数兼ねていたので、母ひとりでも多数の世話をしていたわけである。そこにこの小さな逸話が生れたのである。僕は十八九才の頃、神戸の遠縁の家に世話になって学校へ通った。七月九日頃は毎年学期末試験の最中であ

る。

七月二十一日頃から八月一ばい夏休みで帰省した。誕生日のごちそうにありつこう(自分一人のため)のみならず兄弟七人のためだ)と思つて、八月八日の夜、母に「明日は僕の誕生日だから、ごちそうしてね……」とねだつた。母は一寸考えていたが「チトちがうようだ、お前が生れたのは真夏でなくて、もう少し暑さがヒドクなかつたよ」とのことだつた。僕は当時田舎ではまだ旧暦と太陽暦と両方使つていたので、「それそれは(の意)新暦と旧暦とのちがいで年によって多少ズレてんね……」母「そうかなア」とて翌晩心ばかりの田舎のごちそうにありつ

いた。僕の誕生日の思い出は、こんなケチなものだけしか無いのは一寸淋しい。

清正公と同じ日

北九州 出口 夢詩朗

①僕の誕生日は七月六日なのだが、旧暦六月廿三日だつたとの事で、清正公(加藤清正公)様の日だから清正公様のように立派になるんだと、日蓮宗の信者だつた母はいつも口癖のようにいつて居つた。子供の頃、加藤清正といえは可成り豪い人だと思ひ込んでいたのので何か嬉しい気がして居つたのを今も時折り思い出す。

酒が待っている

大阪 石倉 旅風

①私の誕生日は、明治三十三年七月一日、如何に精密精巧な機械でも斯うは持つまい。

夕食には三十八年間缺かさず飲む酒ながら流石に七月一日の膳には、一級上位のそれが私の帰りを待つて居る。然し誕生日に飲む酒の感懐など殊更に湧くこともなく、所謂立身出世型ならぬ身の、妻と共に世の中を遠視して至極長閑に平凡。心頭を滅却すれば苦も亦楽しとばかり今年誕生日は二合の酒で愛する李白の詩でも吟じて平凡な我が誕生日のひとつ家内中を悩ますこととなるでしよう。

平凡を祝うてくれる誕生日

旅風

お地藏さまのごりやく

愛知 広瀬 悠々

①御書面の趣旨お答え致します。私至つて平凡な人間です誕生に付いて語るべきりやくなものはありません。

明治十九年七月六日旧暦では六月二十何日かと母は言つてました。至つてヒ弱い性質にて医者に見離されたさうです。それでも親達の愛情にて当時子供の病気に大

変効験あらたかなお地藏様がありまして、それに願かけましたら不思議にも医者の見はなした子供も薬一服も吞まずに治りまして今日八十才迄も生き延び男子で当町最

ねばり屋

神戸 仲 どんたく

①生れた時は幼少の為しかとは記憶致し居らず、聞けば非常に安産にて産婆が間に合わなかつた由。その割に現在気長にて小生のことをねばり屋と称する人も有之。

本年は、寂しさは定年となる誕生日

どんたく

と覚悟致し居りしところ、どうした風の吹きまわしか取締役と言うことと相成り、又当分あくせく致す羽目となりし次第。

②4月4日長女章子誕生

木も草も花をつけてる誕生日

蕨風子

1月13日二女幸誕生
冬晴れて見馴れし山も高く見え

同

新戚へあづけられて

尼崎 長谷川 三司

①男三人兄弟の末子に生れた私は母が病弱だつたせいもあって、誕生日も誕生日らしい祝をして

らった記憶がない。四才の時に母と死に別れて親せきの魚屋兼仕出しやの魚友と言う家にあづけられた。そこのお母さんが、芸ゴトが好きでこの子が女の子であったら貫い切りをするのと言ったという事です。そこで踊を習わされたりお母さんが派手好きだったので私の誕生日には近所や親類の子供を集めて大げさに祝ってくれ、その席で私に「かっぱや」を踊らして喜んで居た様ですが、私には記憶がない。その家に居た三年間には何かと、誕生日を祝ってくれ集った人からお祝の品を貰うのが嬉しかった事をおぼえて居ます。七才になって元の家に帰ったと言うのは第二の母が来たからです。

余り裕福でもない家にわんぱく盛りの男の子が三人いたので母も大変だったと思います。それやこれやで、私の誕生日は七月十九日、大阪は夏祭りの最中で京都の祇園祭りのあと平の町の御霊神社（私の氏神）の祭礼とつづきそのあと二日おいて私の誕生日だったので、いつもお祭りといっしょくちやにされてお祝の方は流し勝です。

戦災で焼かれて大阪の家が無くなってからは氏神さんとも縁が遠くなり祭りが来れば誕生日だったのも思い出さないま、に忘れ、時たま

「きのうは貴方の誕生日でしたネ

すみません」と思い出した様に家内が言っていて誕生日の嬉しいのも二十才頃まで、しよう。もうこの年になると誕生日が来るたびにあの世が、近くなる様で心細く忘れれるともなく忘れ勝ですが、四五年前から孫が家に来る様になってからは、ささやかながら孫のための誕生日を祝う様になり孫の学友二三人を呼んで私が、子供の頃味えなかつた喜びを孫の良き思い出になる様願って居ます。

孫も自分の誕生日の集いが、嬉しく自分が大きくなつたら「おじいさんに何をプレゼントしようか」と今から心配して、おじいさんの誕生日は何日かと自分の誕生日のたびにくり返し聞きます。そんな時「おばアさんに聞いてもらえん。おじいさんはもう忘れてしまった」と笑ってすまして居ます。

氷室饅頭の思い出

越中今雨

①私の故郷石川県金沢市には奇妙な風習がある。

七月一日を氷室というが、その日氷室饅頭を売るのがそれである。その饅頭は形こそ変らぬが、中の餡には砂糖、塩は一切使わないのでその味たるやまことに味気ないものである。氷室にこれを食べると万病を排すという説が伝えられているのである。又宴会も催された。戦後の今日そんな古い考えは捨てたであらうと思われる。しかし広い金沢のどこかで二軒や三軒は今もなお氷室饅頭を売っていることを信じてたい。明治四十一年七月一日生れの郷愁か。

誕生日はきのうと夫婦笑いあい

しみじみ誕生日を思う

神戸 吉田隆史

①私は明治三十三年七月七日生れで、日露戦大勝利に幼時兵隊ゴッコをして喜んだ事、日韓併合し旗行列の思い出、明治大帝が崩御となり全国民が玉砂利に泣きぬれました。

大正となって第一次欧州大戦が起り、日独戦争から、ヴェルサイユ条約、東宮外遊（現陛下）ワシントン会議、五五三、関東大震災、かくて昭和となり、ロンドン会議、満州事変、誕生日の七・七に、上海事変、聯盟脱退、ワシントン条約破棄、防共協定、支那事変、盧溝橋も七月七日に爆発、第二次欧州大戦から紀元二千六百年、国家総動員、七七禁令、興亜が叫ばれ、ついに日本は!!! かかる月日の誕生日にて有名無名の諸氏から祝電よく頂きましたが鹿戦と共に、一無惨。

二仲

御誌を初め全国の川柳誌を愛読し味読、日毎川柳と遊んで居りま

妹も同じ月日

福島 足立春雄

①誕生日についての感想は何しろ生れた時が判らないので、特に書くべきものを持ちませんが、夏の暑い時に母親に迷惑を掛けたことだと思ひ、それが不幸の初めでしょうか、但し二人兄弟の私の妹も同じ日、大団圓時刻だと聞かされて若干珍らしいケースかとも思っています。

自動的に

愛媛 村上旭童

①田舎のこととして格別誕生日を祝うという風習もなかつた私の村で、幸い当地の祇園さんの日（旧暦）に生れた為自動的に祝って貰えるので弟妹達に羨まれ又大いに自慢し



結婚式場

長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ● 6階

大坂日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

ていたものです。

皇太子誕生
十二月二十三日男の日
作者失念

睡蓮と揚羽蝶

大阪 橘高薫風

①私は大正十五年七月十一日に生れました。日曜日であつたらしい。日曜に生まれた者は、などと言ひ出すと大道易者めいてくるが、ある時、一年三百六十五日、その一日一日を季節の花で表わした珍らしい表を見たことがある。牡丹の花から昔の花まであつた。七月十一日は睡蓮で、花言葉は清潔。それ以来睡蓮を「わが花」と感ずるようになった。

うっとうしい梅雨が七月の初旬まで続くが、誕生日が近づくにつれて太陽はかっと照りつけるようになる。ワイシャツが際立つて白

く目に映り、揚羽蝶があでやかに
お目見えする。

七月十一日は神からの賜りも
の、私にとっては一年のうちで最
も美しい一日なのである。

自分の句を佳句に推すことは気
恥しいことだが、

蝶の妍極まればわが誕生日

薫風

戊戌

京都 田中鳥雀

①私は七月二十二日に生れ、数年
後、弟が八月二十三日に生れた。

②御先祖に灯明あげて父となる
男の子どいたくと生れたり
快哉
初声をあげて憂世へ泣き出る
声
どん底の屋根つきぬけて呱呱の
声
乳首吸う二誕生の人見知
相界
誕生に嬉しき苦勞始りぬ
土筆
誕生の子へ注文が多すぎる
あやめ

誕生日だけは明して女給立ち

木公

産声へ天も地もない朗き

耕朗

吸入器ニタ誕生を瘦せ続け

司郎

臍の緒のひからびを見る誕生日

齡怪

子供等のプレゼント

広島 石原伯峯

①長女とや梅一輪にたとえんか
これは昭和二十三年、私の長女

②コスモスの咲く家欲しい誕生日
西川安静

生国魂神社と私

大阪 市場没食子

①七月九日が私の誕生日で、その
日は大阪の生国魂神社の夏祭りだ

④四十代の頃までは誕生日が楽し
いもの一つであったが、六十才

孫達とともに

下野 中村九呂平

①四十年の時を経ては誕生日が楽し
いもの一つであったが、六十才

趣味の
きもの



高橋 操子

岸和田市野田町一七五
TEL岸貝局②六六三一

柳と俳句の区別がつかなかったら
しい。今の私には前記の色紙と歳
時記は何物にも変え難い宝もので
ある。

忘れ勝ち

川西 戸奈巳之介

①母が在生中は、私の誕生日には
きままつて赤飯を炊いて祝ってくれ

②仰山にうるこをとばす誕生日
路郎

官幣大社と言えは値打のあった
時代で、生国魂さんと私の誕生日

それがあらぬか、氏神さんより生
国魂さんの方が好きで、夏祭りの
御輿の渡御も中々豪華であった
が。惜しい事によく雨になるか、
今にも降りそうな日が多かった。
それは梅雨の名残りの季節に当っ
ている為めであろう。十人兄弟の
長兄として私は母は赤飯を炊いて
くれた思い出もあるが、結婚して
からは家内は赤飯を好かないので
もっぱらビールを殖やしてもらっ
ている。

車やバスの間等の都合もあって
大抵十七時頃帰り仕度をする、
それに感づいた孫達もそわ／＼し
て、付いて行く準備にかゝる。言
いふくめでも聞かばこそ大声に泣
き出す。そのときの孫たちは血相
までかえ火がついたようである。
私も妻も涙がこみ上げてハンカチ
をふりふり何べんもふり返って
は涙をぬぐう。汽車に乗ってから
も当分はあのときの情景が浮んで
落ちつけない気持ちだ。年を重ね
るごとに孫も殖える。帰るとき
は互にとでもつらい、でも次の孫
の誕生日が待たれてならない。一
晩泊りのことも妻と相談した、き
つと行く。来年は五人の孫だ、泣
かれても、泣いてもよい妻ときつ
と行く。

句集「孫の手」の感動

東野 大 八

富士山麓の大陸川柳人同窓会

で、酒井塵声さんから一冊の本を頂いた。句集「孫の手」三上十進、とあるこじんまりとした本。

ある日、出勤の際これをポケットに入れて車中でひろげた。一読すっきりその素直な作品にイカれてしまった。帰りにもまた読んでみた。ところが疲れたときに読む方

が、句の内容にぐっと迫力の出ていることを知った。ほのほのとした肉身愛が、ささくれ立った心をフランネルを頬にあてるようにふんわかふんわかとさせた。またと得難いそれは慰めのひとときであつた。

句集にも意欲的な発露を行間にこめて真剣勝負のように迫ってくるのと、この本のように気楽に、まるでコップ酒について出た口とりのように、気どりになく、さっぱりと出てきてニコニコしているのと二様ある。(その中間はカゲが薄い)この本はあきらかにあとの

方だ。

作者は見たことも話したこともない人だが、とにかく六つの歳に父をなくし、ひとりっ子の息子に出来た子、つまり孫、この人間としての環境が、眼の中へ入れても痛くないどころか、食べてしまいたいほど愛しい、そのせつせつたる肉親愛から滴りおちたのが、この句集の一つ一つの句である。

みんなハツラツとして生きていて、すべてに血が通っている、理屈の多い柳論ばかり、かつての私は偉丈高に、あるいはオツにすました語り口でやってのけていたも

のが、この句集をみるとはずかしくなった。まるで、一筋ナツでいれない奴が、赤ん坊の眼にてれる、といったような図である。大陸の引揚者で、もう停年がきた、孤独な一人の老人が、新しく幼い身体をかかえ、その稚ない心に相好をくずすところけそうになっている。私もいつかそうしたいことになるにちがいないが、この作者三上さんのように手放しのおじいさんになりたいと思う。こころさやかに、明日もきつとお天気がちがいないと思うようないい句集である。

じいちゃんのつぎにテレビが好きという
(殺し文句ですね)
はげている頭を孫がふびんがり
(グツときたことでしょう)
百円札大人の金と孫かえす
(フムとうなつてギョッ)
土曜日染しシートを孫とする
やっと立つ孫と半日くたぶれる
(おぢいちゃんはホトケ様)
ふと孫に似てるコケシをかうも
旅
夫婦きり孫の話でめしがすみ
寝そびれた孫負うて出る天の川
(庶民の哀感いうことなし)

東京都 富士野 鞍馬

孫の手を引いて二万歩あるこう

須坂市 高峰 柳 児

流し眼へ理性の腰がくだけかけ

内職の乳房へかみつく泣きじやくり

年功を重ねて派閥に押し出され

勇退にして停年を慰ぐさめる

私財なげ出してワンマン娑消し

今治市 長野 文 庫

蛍光にせず十燭のまま旧家

筍の貫禄着てる時ばかり

呼び水のお金が足らぬ儲け口

いざこざが起きて莫産巻くおままこと

無精髭警戒をする久しぶり

迷信だよと厄年を慰める

同業として盗み見る値段表

大洲市 米 沢 暁 明

笥はここでも爪を立てられる

側近を増長させぬ裁きよう

八等身縦縞横縞よく似合い

盛り場を今日は持つてる歩きよう

武者人形ケース破って出て来そう

まかしとけ何とかすると言っただけ

男一匹金で妥協はせぬ男

松山市 月 原 宵 明

蜜豆へまだ恋でない喰べ盛り

特売へ困地集団して出掛け

売出しは破産するよなピラを撤き

悪友の声とも一人いる受話機

はしかの児抱き寝あやめの硝子越し

石垣はいびつ古城に叙歎なし

和歌山市 秋 月 宏 方

ボデイのつや不渡り出したとは見えす

伴奏がほしい蝶々舞うばかり

女性軍視光バスで中をとり

孫のよなガイドに遺跡教えられ

HだわとHの娘が笑い

星空もムードの一つピヤホール

名古屋市 長谷川 鮮 山

想い出をたぐる甘えた頃の付

思い切つて捨てる大掃除の整理

猫に口づけしてほのかに少女思慕

すぐ権利頭にかざす婦人会

おせっかいすぎる話へつんとする

上田市 金子 吞 風

派手好きナママにピアノへ通わされ

離乳期を泣かせ鏡へ根が生える

町工場労基すれすれ灯をともし



命拾いを した話

—溺死寸前—

後藤 梅 志

茨城県水戸市の郊外に、那珂川の清流がある。

この那珂川は、水府流の発祥地で、加成り深く、川中は増水すると五〇〇Mもあり、ふだんで、三〇〇Mぐらいある。堤防高く、兩岸の一方は水田、一方は田畑。ひろびろとした平野をなし、その中にゆるいカーブをなした清流が、急流をえがいている。

私の生家は、この川からは半里ほどはなれた、水戸市郊外。町外れからみる那珂川は、葉林で美しく、いまでも險にうかび、望郷をそそるものがある。

豊乃先生の句に

ほほじろの声を忘れた河の中

という秀句があったが、この句は、恰度こんなところで生れたかと、思われる。大きな水戸家の菩提寺と、その境内。八幡の森、

茶畑や菜の花も、野鳥や子供の遊び場だった。

水戸は、昔から士族の天下で、尚武の土地であるだけ、鼻たれ小僧にいたるまで、泳ぎを知らぬものはない。平気でこの那珂川を、泳ぎわたる。パタ足という幼稚な泳ぎ方で泳ぎまくる。餓鬼大将は必ずいる。五人、七人の集団で、ケンカもさかんである。

ある真夏の午後のことだが(明治の終り、私は七歳の昔悪童達、四、五人が那珂川へ遊びにきた。この悪童達は、川向うの芋畑へ、さつま芋をぬすみに行くのだ。私はまだ就学前のことでも、留守番をやられる。むろん一緒に行きたくて仕方がないが、あぶなはいわれ、いつも辛抱していた。川には、直径八寸位の棒ぐいが林立して、棒ぐいは川下まであ

り、護岸の役目をしている。子供が遊ぶのは、その内側で、外へは出るなといわれていた。増水すれば渦を巻く急流で、危険な箇所だが、そこを乗り切れば、あとは楽だともきいていた。毎年、四五人はこの那珂川で死ぬ。

水の事故は、おおむね、水の誘惑から起きる。

私は、この棒ぐいの外へ勇ましく泳いでゆきたかった。泳げる自信はあったが、一人では恐ろしいから辛抱した。だが、三十分もひとりしていると、大抵たいくつする。出たり、引っ込んだりしていたが、その内、勢いあまって五六間泳いでしまった。すると急に大胆になり、ええまよと、向う岸へ、習いたての横の泳ぎを出した。

あぶない!! あぶない!! やめろ、やめろと誰かが叫ぶところだが、あいにく、川ぶちを通る人もいなかった。なるほど、ぐいぐい流されたのは十間ほどで、すこし楽になったが、もう引返すわけにはいかないから、そのまま泳ぎつつけた。

川を泳ぎわたる泳法は、からだを斜すにして、上流へ向いて泳ぐ。三尺泳げば、二尺は水流に引き戻される。而して向う岸へ着くには、達者でも大なり小なり、流されることを覚悟しなくてはならない。疲労することおびただししが、たびたび経験すれば、力のバランスをとるコツが分かる。

私は一寸振り返って見たが、まだ一〇〇Mも泳いでいないのが分かった。川中は三〇〇Mある。なのに、もう半町は(六〇M)流されている。勇気をふるい起こして上流へ斜めに泳ぐが、少しも進まない。

もう川の半分は泳いだと思つて、向う岸を見るが、人影もない。まだいぶかかると思うと、急につかぬものが出る。川の真ん中というものが、こんなに恐ろしいものだということが、はじめて分かってきた。子供心に、これは大変なことをしてしまったと気がついたが、泳ぎをやめるわけにはいかなかった。

ここで迷いが出て来た。実はもう少し頑張つて泳ぎさえすれば、そこは浅遠さで、背が立つのだが、それを知らぬ悲しさは、見切りをつけた。見切りをつける、元の岸へ引返しはじめた。しかしこの時、既に二三町は下流へ流されていたのだ。

山登りで遭難するときも、同じとおもうが、恐怖が先に立てば動揺する。自信もなにもぐらついてしまふ。常識では、半分も来ているのに、引き返すという法はないのだが、そこは子供。恐ろしくて無茶くちやに泳いだ。元来た道へだ。

段々ちからが尽きて、遂に、最後の瞬間が来た。川波に呑まれるのである。一番恐ろしい急流のあ

たりで、私は川底へ吸い込まれるように引き込まれてしまった。そうなるのは、ただながくばかりであった。意識がもうろうとしたなかに、力強い水の流れを感じた。川底の砂の上を転るげ廻った。水はいやというほど呑んだ。耳からもハナからも、水が這入る。くるしい。くるしいが、腕も、脚も動かさない。おれは死ぬのだ。しかし、川底の砂の上は、なんと心地よいものか。もうろうとした、こんな感じが浮かんだ。

その時。ドンと、からだにぶつかったものがある。何かはしらず、しがみついた。棒だ。棒ぐいだった。

棒ぐいが、川底に、横倒しになつていたのである。夢中でその棒ぐいにしがみつき、急に気力が出たのが分かった。人間の必死の努力はすさまじい。

ぬるぬると水苦がついて、気味のわるい、半ば腐蝕した、その命の親の棒ぐいをつたって、ようやく、水面に顔を出した。そこには、すでに正気にかえった目になつたらしい、棒ぐいの林立するのが見えた。有難い。おれは助かった。そうは思ったものの、手も、足も動かない。

岸へは、二間ほどで、そこには茨らの藪が連なっていて、一と踏んばり、踏んばろうとするのだが、体力を使い果たしたままで

はただ棒ぐいにしがみついただけ
手も足もかきもく動かなかった。

× × ×

私が助かったのは、五六町下流
の、見もしらぬ川岸だったが。草
むらと、砂原の段々に堤防をきす
いた、熱い砂があった。八月の太
陽が照りつけている。その砂の上
で水を吐き、寝転ろがっては吐
きして、あたりがぐらくなるま
で、へたばっていた。

真闇くなって、ひとり息子の私
が帰って来たときは、両親とも、
出たり這入ったり、心配していた
様子だったが、私はなにも云わな
かった。黙ってご飯をたべ、何を
訊かれても答えなかった。
不思議なことに、このことがあ

っていらい、私は水に対する恐怖
がまったくなくなつた。

もつとも、その翌年は、川越し
の免状をもらつた。

梅志

益過ぎる川に西瓜の皮が浮き

同

人の寿命には、神秘的なところが
あり、死ぬべかりしものが生き、
またその反対に、簡単に死んでゆ
くものがある。神秘的であるとい
うふうに考えると、どう筋道を立
てても、人生には、神秘的なもの
のこり、月並みと考えていた、
親孝行の出来なかつたことが、惜
しまれてならない。

(おわり)

明治川柳と風俗

(6)

奥津啓一朗

活人画

明治初年に外人によって伝えら
れた欧州活人画が、二十年三月、
東京虎の門工科大学で、博愛社
(現日本赤十字社の前身)に資金
を寄附のため、内外の貴賓を集め
て、公演したのが嚆矢だといわれ
ている。

活人画人で作った人形なり

活人画扱てすます事

好風

武ちゃんを殿様にする活人画

きみ子

当初の演目はハムレットなど多
くは西洋の翻案であつたが、のち
には種々史実物におよび、背景と
扮装(ふんそう)さえあれば素人
にも簡単に出来るところから、次
第に盛んとなり、主に女学校など
で余興として行なわれた。

活人画海老茶を脱いで鎧を着

つる

活人画猫を押へた和藤内

剣花坊

誉められて画像は頬をサツと染

め

いつまでも秋波で居る活人画

活人画きれうのいいが誉められ

る

活人画先生が来て笑はせる

活人画お友で済ぬ笑ひ声

退屈して

活人画小声でせりふ云って見る

こんなこともあつたであらう。

科白(せりふ)もなく長時間同

じ所作でいる事も出来ないので度

々幕となつた。

活人画屏風の幕をチヨンと引き

当今でも学芸会の前後には役の

事や、うちの子を出演させろと

雪のや

菊子

英子

か、出さないとか、役者の真像を

させるのかと、担任の教師に談判

にくる父母がままあるという。

活人画保証人から小言が来

栄子

飛・燕・往・来

★加茂正一氏より(東京都)

一節 節一

おかげん如何、お案じしています。
大事にして下さい。お互いに年が
年ですから大事にませうよ。
前号川柳の若本氏の外来語の記事
をみて、まちがっている事を見出
し、ちよつと注意します。

「がんどき」は立派な日本語で

す。「もどき」はよく似たものに

使います。「うめもどき」の如し

「がんどき」は雁の味や香に似

たものといふ日本語。それに当る

ポルトガル語が Fideos (フライ

ヨース) 飛竜頭、大阪ではハヒロ

ウス。これなら外来語です。

よけいな事を申出て恐縮恐縮。こ

れで、時々川柳も読んでいる事

をご承知下さい。

じめじめとよく降っています。こ

れでツユがあがったら、又暑くな

ることです。お誕生日が近づき

ますネ、大事にして下さい。

奥さんにも、どうかよろしく

六月十三日

敬具

いらせられ水らく早稲田の国語の

教授をされていたこともおぼえて

います。古くから本誌を愛読され

ていらつしやいます。

★岩崎愛二氏より(京都府)

一節 節一

先生の病氣お案じ申上げており
ます。すでにご退院と承り一と安
心いたしました。奥様のあれこれ
のご心労お察し致します。

わたくしも、真似したわけではあ
りませんが、生れて初めて病院生
活をして来ました。五日から一週
間、大阪北野病院へ例のドック入
りというわけです。少し糖尿病的
けがあるという結果を承りました。
こども等夫婦とわたくしの女
人が強引にやった仕わざです。
おばあちゃんもおらんのに
なんのドック入り

先生のご平ゆを祈ります。

奥さんの悲愴な文章つらいです。

川柳初篇研究

バックナンバー
ご希望の方は

本誌昭和三十八年四月号から
昭和四十年六月号まで
揃えております。

誌代三二四〇円

(書報小包料社負担)

川柳雑誌社サービス部へ

万国帖

北川春巢選

香川県 三井 醉 夢

咲きほこる牡丹虚飾の二三日
喝采を浴びた牡丹の散り急ぎ
笛吹けば踊る男になり下がり
ひざまづく求愛何か道化めき
懐しのメロディ実存主義の頃
焦点のないまなざしは別れる気

大阪市 福 島 正 則

核戦争反対検挙せずに欲し
植木鉢野菜にしたい値が上がり
極楽を疑う余地のない余生
エサ拾うキリンほんまにドッコイショ
ズボラ性我慢強いと褒められる

奈良県 草 深 醉 升

食べながら年増どうしのよく喋り
B・Gの重宝がられ嫁き遅れ
おとなしくつかまえられるツンポ嬢
脚前に組んでバイブル読みふけり
強い歯の自慢も定年までと知り

京都市 松 川 杜 的

借景の比えいの上を黄蝶舞う
唯座して眺めて京の庭を賞め
鯉のぼりの眼にもれんげの少な過ぎ
首振り三年未だ未だ俺には遠い道
他人さんが見れば五十の男か俺

倉吉市 奥 谷 弘 朗

スネて見ることも忘れて妻も老い
はがきさえ下書がある筆不精
検査院鳥が歌うに花咲くに
天ちゃんを見に行くという民主主義
貰い娘が父と呼ばないまま婚期
岡山県 直原 七 面 山

芸術の中で浮世絵乳房出し
聞く耳持たぬ恋の烈しさ
ルージュ濃く濃ゆく女の武装成る
血迷うてかひ孫のような妓に溺れ
楽しさは愛しい人と指角力
大阪市 西 川 晃

顔死の友

ストレスが妻と子どもへ暴発し
コマーシャル肝臓のへん痛くなり
初心忘れずギクシヤクの句をつくる

酸素つぶ絶望感を蒸溜す

仙台市 平 野 光 道

母ひとり娘ひとり冷蔵庫も飾り
朝礼の訓示寢床で考える
ボン友の妹こっそり嫁にゆき
ストできぬ母子は心中するばかり

新居浜市 小 林 孝 正

明日あるを信じて細き灯を点す
栄転の沙汰鼻唄も出るトイレ
大言壮語してて勘定書はケチリ
旅行する筈の貯金を又降ろし

出雲市 竹 内 李 明

上向いて歩こう新緑がいっぱい
エスケープあの日の土手の曼珠沙華
隙があるようにマダムは手を握り
皆達者鯉悠々の五月晴
大阪府 早 川 清 生
夜桜を義父の選挙の票買いに



うちが勝つとみたか情報売りに来る

緑の雨が選挙終わった町流す

岡山県 木宗 宗義

嫁きおくれ三面鏡が急ぎ立てる

善人の顔で称える御念仏

子供部屋確かめ春の夜を閉じる

奈良市 村上 春巳

世の中が狂うと気候まで狂い

起工式汚職のうわさちらと聞く

ハイティーンすでに悪女の眉をひき

強盗も一等国の線を行き

鳥取県 鈴木村 諷子

鏡に向えば亡父の顔写り

苦勞しに生きてるように活きている

術策を詰めたかばんを振って来る

憎いと思つた嫁と二人で生きのこり

今治市 越智 一水

ベトナムの戦火へ蟻のデモ続く

校歌もおとぎれとぎれの同窓会

貧乏に負けぬ勇気を子に教え

大阪市 今西 章雅

友人と張り合つた妻皺がより

どこ良うて惚れたといとこだから云え

弱音器トロンベツトがむせび泣く

青屋市 丸川 初甫

ウインクと顎で自分を使い分け

新調の靴どた靴に追い越され

表彰の朝幸せな爪を切り

鳥取県 清水 保

お交りはないかとつばめ一年目

嫁の無い農村機械ばかり増え

健康がせめて宝の俺の初夏

松山市 月原 宵明

夕焼へ養老院の赤い屋根

そそとして理性の強き娘よあやめ

人生をもう薬草で諦める

加賀市 那谷 光郎

ボーリングに似て空躰子が倒れ

ママごとのなかで野菜の値が上がり

以下甲乙と称す契約たしかなり

玉島市 井上 旭峯

あやまりに来た子の勇気ほめてやり

内風呂で甘える髪をかきあげる

養老院やっばり浮気の虫が生き

大阪市 福井野 迷路

あんたかいなと老眼名刺読んどらす

玉手箱の煙見る間の長いこと

大阪市 川口 弘生

共稼ぎ女中が欲しい疲れよう

義理の用で気楽な招きに応じ得ず

松江市 柳楽 鶴丸

春斗へ腹を立ててる小企業

軽犯スレスレ露出過度になやまされ

倉敷市 水粉 千翁

清貧の花を愛して花鉢

濡れているまつ毛で女云い尽し

宮崎市 野口 卯之助

公休日使わにゃ損のように妻

初恋を思い出させる定期券

大阪市 西本 保夫

御近所の目をさげ日曜出勤し

会釈してくれたピラでもすぐ丸め

枚方市 宮川 珠笑

婚約をすまして娘肥えはじめ

結納に触れて足踏みしてる恋

大阪市 藤富 淀月



刺勘を一人で扱うほどにもて

代返の二度目は茶房おごらされ

京都市 室井八九寸

大きすぎるバックに検挙うろたえる

電報を郵便にしてしもたスト

名古屋市 花東千久良

鯨魚展一尾何万円も泳がせて

還り入幕胸毛にファイトちらつかせ

鳥取市 近藤秋星

ホイッスル決心促すように鳴り

逝く春やあの娘も母になりました

守口市 橋本雅渠

肚立ちをぐっとこらえて四十代

人目など気にしてません若い恋

羽咋市 三宅ろ亭

人生は七十年と赤頭巾

月謝だけ親から取って茶を休み

宿毛市 渡辺伊津志

嬉しさを素足の音の高さから

子心に帰れば老母涙ぐみ

小松市 関戸宗太郎

下請も人間ですと陰の声

倒産のたとえ話しに座が白け

兵庫県 常岡孝風

泣いているのか笑ろてるのか女患部屋

婦長の一言ボス思しんとなり

神戸市 吉田隆史

鯉職銀行の屋根に尾を預け

自転車のおまで教へ貸してやり

大阪市 大池芳

腰まげて手を取り合って花見かな

大阪市 多田富士

床の間の桜で一ぱいもう一ぱい

大阪市 木村濁水

酔いつぶれ見て米ぬ花をほめており

大阪市 田中多幸

米びつがからも気にせぬ花見酒

大阪市 谷沢源川

農機具を買えば息子は社に勤め

加賀市 大山雅城

料理屋の路地が汚職の道になり

和歌山県 山本定男

木の芽時わが蝶番にもガタが来て

鳥取県 清水一保

目に若葉耳に公約素晴しく

大阪市 木村久子

ラッシュ時只運ばれて人かいな

大阪市 田治一登

彼岸過ぎ桜待つ間の日の長さ

大阪市 花田繁子

マラソンを全コース見て応援し

大阪市 上林清江

パチンコをやめる苦勞の廻り道

大阪市 児玉充弘

大金が出来て土佐大好きになり

大阪市 柳生政夫

満開に下戸千鳥足花も見ず

大阪市 鈴木生伝

急行に乗って二時間下車忘れ

大阪市 松田半月

気をぬくとやはり出て来る河内弁

金沢市 根上杏花

歩きかけの児があるらしい破れよう

七尾市 松高秀峰

手不足へ仲人嫁をもって来る

大萬川柳

兼題「真つ先き」 入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 四百三十二句
入選 六十三句

出雲 李朋
食堂へ子が真つ先きに席をとり

大阪 金三
記者の勘あるときチツが出し抜かれ

大阪 弓彦
真つ先きに来てくれたのは遠い親

大阪 野迷路
真つ先きにお礼まいりのム所がえり

加賀 久雄
真つ先きに意識不明が母を呼び

大阪 琴女
真つ先きに来て盲点をつく所存

南河内 吸江
真つ先きにお宅へ来たと奉加帳

大阪 十六里
義理堅いのが真つ先きに来て悔み

岡山 一声
真つ先きに候補縁故の票を読み

岡山 十九平
真つ先きに株価にひびく車中談

大阪 柳宏子
真つ先きに検査けるはれも雑魚ばかり

大阪 市郎
五十音いつもトップに呼び出され

岡山 久米雄
真つ先きのデモ案の定速捕され

大阪 保夫
流行の尖端を着て瘦せ細り

大阪 没食子
真つ先きに例の一言居士が起ち

大阪 保夫
真つ先きに来てゴマ摺りが酌をする

高槻 潮花
真つ先きに書く寄附帳は額でもめ

仙台 光道
只今とも言わず真つ先き相撲かけ

東京 泰造
真つ先きに指名手配が故郷へ飛び

大阪 あいさ
真つ先きに自家用で来る遺産分け

大板 弘生
従いて行けばよいのに先きに立つ若さ

大阪 万竿
真つ先きに名を売る工夫して出馬

神戸 どんたく
真つ先きの知事の祝辞は代理がし

大阪 良
二二三真つ先きに買ったのはチツ

おぼん
真つ先きに酔うて友まくこつおぼん

大阪 慶之助
当然のようにアベベはテープ切り

大阪 文秋
銀行が真つ先きに来る土地が売れ

大阪 春葉
真つ先きに来たお見舞は手ぶらなり

大阪 柳志
真つ先きに持ち主が来て小火です

大阪 小松園
真つ先きに逃げて重傷だけですみ

大阪 好郎
ふだん着のまま駆けつける枕許

大阪 梅里
真つ先きにチツ把握らすても使い

大阪 よしを
角行道をあけて意表をつく先手

大阪 双葉
暮おりに真つ先きかけたお手洗

大阪 竹莊
真つ先きに呼ばれてテスト面喰い

大阪 凡茶
真つ先きに並んでもろた整理券

大阪 鉄児
新しい筆先頭の署名する

大阪 弘道
真つ先きにマイクが囲む時の人

大阪 清人
真つ先きに眠むれる神経萎まれ

大阪 宗義
疲れても母真つ先きに起きてくれ

石川 宗太郎
解散を知らせるボスが動きだし

富田 美房
月賦屋へボーナス袋の封を切り

大阪 美房
真つ先きに落選候補へ逮捕状

大阪 忠三
真つ先きに刑事のよう記者が来る

大阪 忠三
真つ先きに母へ知らすと優勝旗

大阪 忠三
真つ先きに釣って廻りの竿が寄り

大阪 忠三
真つ先きに見たので参考人にされ

岡山 謙士
真つ先きに断られ茶屋でそばを食べ

神戸 どんたく
真つ先きに寝てんがりに起きるパパ

加賀 光郎
真つ先きに義理果しく黒田節

米子 雄々
真つ先きに児を抱くパパの旅がえり

和歌山 木魚
真つ先きにマダムが知っていた左遷

篠山 可住
真つ先きに社長が来てる社の空気

加賀 味平
馬鹿にしたのが真つ先きに来た

大阪 梅里
真つ先きに来て会場を広く見る

大阪 梅里
真つ先きに異議なしと言う役も決め

大阪 梅里
大萬川柳ベストテン(六月現在)

大阪 梅里
一 梅里 一七、〇 大阪

大阪 梅里
二 どんたく 一〇、〇 神戸

大阪 梅里
三 柳志 八、五 大阪

大阪 梅里
四 阿茶 八、五 大阪

大阪 梅里
五 美房 八、〇 富田林

大阪 梅里
六 木魚 七、五 和歌山

好郎 七、〇 東北

文秋 七、〇 大阪

圭井堂 七、〇 堺

双葉 七、〇 大阪

桃里 六、五 笠岡

味平 六、〇 加賀

清人 五、〇 加賀

久雄 五、〇 米子

雄々 四、五 大阪

小松園 四、〇 大阪

静馬 四、〇 高槻

忠三 四、〇 笠岡

あいき 四、〇 大阪

弘道 四、〇 山口

次ぎの兼題「割り込み」五句以内

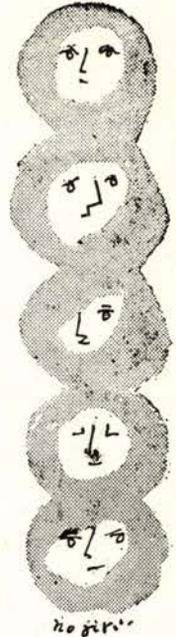
八月の兼題「額」

八月十日 発表

八月二十日 発表

大阪市阿倍野区松崎町三丁目十
大萬川柳 会





入門 講座

研究題 「城」

清水白柳

最近のお城ブームからか復元の城を詠んだ句が多かったので、今回は着想別に集めて見た。

美舟 屏風絵を頼り再建レチャール城
辰始 セメントの城であろうとなつたし
愛鳩 復元の城の真下のスラム街
光道 鉄筋になってお城もネオンつけ
隆史 鉄筋のお城エレベーターでは
愛二 最後の句の原句は「新城は鉄筋銅屋根エレベーター」というのであったが、鉄筋で建てるのは新時代の城にきまってるから新城という語はいらないと思うのでエレベーターでのぼりと動きを入れて見たのである。また観光のためのお城もたくさんあった。
団体の城の角度で写される

守子 大手門観光バスで攻めて入り

万竿 観光に城を遺した武家政治

章雅 拝観料地下の城主の苦笑い

与志 小都市に汚職が匂う城ブーム

真砂 財源難城をかかえて県貧し

みさ子 化粧したお城せつせと稼がされ

酔夢 城が出来観光課が出来人が殖え

愛二 団体の句は城の角度という良い句語で生かされている。大手門の句は攻めて入りというのが面白かった。武家政治の句は観光に城を遺したという風刺が利いているようである。地下の城主の句も面白い観点に立っている作者の姿がある。小都市の句にはやり切れない市民の憤りを感じさせている。財

源難の句は県が修繕費は高くつくし、観光ブームには乗りたしという当事者の焦りを描いている。化粧の句はどうか無理をして修理完成というところである。人が殖えの句は観光のためにお役人が殖えたという行政改革に逆行している点に目を向けて成功している句である。立派な城はよく稼いでいるが城趾となると物かなしい感じの句が多い。

花散ってからは静かな城の跡

雅己 名曲を生みし城趾の昼の月

章雅 想像が詩になり歌になる城趾

句楽坊 出土品城の因果と言いたそう

辰始 城石を割れば苦役の血が出そう

与志 城趾があるとか土を掘り起し

杏花 城跡で土方自然薯掘り当てる

真砂 城あとへ来て故郷の蟬の声

愛鳩 鈴虫の根強く城の跡に住み

美舟 花散っての句は酒をのむためだけに城跡へくる人達を風刺している

光道 名曲の句は荒城の月を詠んだのだが、想像の句は詩人の

眼想を皮肉っているのであろう。

出土品の句は城の因果(と)になっているが城の因果(を)にした方がよいのではないかと思った。次の句の苦役の血が出そうに感じたのは作者の感慨である。土を掘る句の城趾があるとかという語は少し弱いように思う。それは掘り起しという句語とそぐわないものを感じさせるからであらう。自然薯の句はいいところをつかんでいる。山城の姿を浮き彫りにしてその盛衰をえがいているからである。蟬の声の句はまともな感じが、やや低調な感じがするので惜しい。鈴虫の句は、根強くという作者の感じ方がよくあらわれていて良いと思った。三ちゃん豊の句は作者の眼に映った農業のあり方にそっくりの情をうたったものであろう。時代劇に出て来るお城もいくつあった。それは

天竺閣忍者が見上げて孤独

節子 忍者が出る城なら子供知っている

保夫 抜け道の秘密がここに城の裏

守子 追手門下に下りが聞えそう

雄声 追手門下の下りが聞えそう

みさ子 幻の城主を若き血で描く

和三郎 着想によってそれぞれの句の持味が違っているので面白いと思う。赤穂城を詠んだ句には、

黄銅六角ボルトナット及び特殊挽物全般
合資会社
西出螺子製作所
大阪市天王寺区宰相山町142
TEL (761) 3452~4
夜間(762) 4408

明け渡す城が潤んでいる涙

守子 江戸城を詠んだのは、大奥に女体の飢えていたお城

真砂 マンモスのシンボル千代田城という

繁太郎 というのがあった。大奥の句は昔の城中の事を想像したのだが、あとの句はマンモス都市東京を詠んでいるのである。

M 火の海の城へ坂崎出羽守

S 大老の遺蹟で光る彦根城

Y ホリに水入れて引立つ大阪城

Y さびれ行くささやま城のある強

Y み

午前五時静かに聞ゆ城の鐘

周甫
坂崎出羽守の句は芝居の句であるが、その紹介でしかない。地名の入った句はどれも説明で作者不在といえるようである。最後の句は津山城ということであるが、これも弱い。

天主園祿高聞きつ汗を拭く

隆史

天主園妻と二人の空が晴れ

弘朗

残雪は槍か穂高か城の窓

初甫

城を訪ねての旅はうらやましいことである。

ふるさとの古城なつかし雑詠買

醉夢

冷害の故郷に復元の城白

光道

城壁を叩き歴史をさかのぼり

謙士

ふるさとの句は故郷をはなれているものの心を描いて成功しているといえる。冷害の句は人間と自然との戦いの、どうにもならないところに焦点をしばっているのである。歴史の句は郷土史でも編さんするのであるか、城壁を叩くというのがよかったと思う。

お城での野立日頃の娘に見えず

与志

伴はお城が見える二階借

李朋

ロケが来て城戦国の世にかえり

節子

チンドン屋素顔でお城通り抜け

与志
落城を眺めた松も排気ガス
滋雀

外濠に馴れて白鳥慈なし

初甫

銃眼を斜陽が射抜く城平和

弘生

恋の花今も天主のかけで咲き

万竿

アベックに包囲されたる城みどり

醉夢

天主園ビルの谷間にある孤独

李朋

野立の句と二階借の句は城をバックにして、城でなければならぬものを持っているので佳いと思う。ロケの句チンドン屋の句も、作者が冷静にそれを見つめているので句が深く感じられるのである。排気ガスの句は世の移り変りをうたっているが少し物足りない気がした。白鳥の句も奇麗だがそれ以上のものを持っていないように思えた。銃眼の句は表現にげんわくされるだけで浅い感じである。恋の花とアベックの句は現在の城の雰囲気と思わせるのだが、まずこしという所である。ビルの谷間の句には作者の感情がある。現実にはビルより高い天主園のだが、近代的なビルの谷間から見る天主園には矢張り取残されたものの悲哀感があるのである。佳い句だと思つた。さて形容詞としての城の句だが、

杏花
定年が息子に城を明け渡す
雄声

小さくとも自分の城を築く夢

弘朗

始は古いお城にまだこもり

周甫

それぞれのくらしの城にきょう

和三郎

わが城は平穩日曜大工居り

醉夢

未亡人の句には守り続けてという作者の同情がよく判るのである。定年の句には悲哀というよりは一種の安心感というものを感ぜさせるようである。自分の城の句は器用にまとめられた感じのする句で惜しいと思うが佳句だとは言えない。始の句はお城という大きな形容でなくて古い殻ぐらゐの方がビツタリするのではないだろうかと思つた。くらしの句は腕にまかせて作り上げられたという感じの句であるが、つかむところはつかんでいると思う。日曜大工の句は婦唱夫隨をよく描き出して面白く思ふ。

一城の主となつて屋台店

滋雀

一城のあるじこれでも嘘は下手

謙士

一城の主朝寝もしておれず

雅己

おとんほまで一国一城の主面

八郎

一国一城自負に大阪人は生き

章雅

屋台店の句は対照的なものを持つて来ただけで感情がない。嘘は下手の句は作者が訴えようとすることがらが、第三者にはつかみにく

いとところがあるで惜しい。朝寝の句はハッキリしている。その意欲が頼もしいと思えるのでうれしい句である。おとんほの句はおとんほのあいままでがと父は思つたという句意は面白いので何とかいい表現法がないかと大分考えてみたのだがとうとう出来なかつたので原句のままに出した。大阪人の句は自負しているという句語が邪魔なようだが矢張りこれではなれないようである。

万里の長城揚貴が綺麗すぎた

H

長城が出来て始皇帝寝につき

M

こうした句は古句に多く残されているので、着想としてはいいのだが現在の作者としては骨折損になる憂があるのである。

ハリストは勉強部屋に籠城し

弘生

苦しい句である。ハリストが苦し

いのではない、籠城という字の使い方が苦しいと思つたのである。

法城の弥陀おびやかす四面楚歌

句楽坊

四面創価という言葉が経典にある

のことも知れないが、創価と限定しないでそれをふくめて発表句のよう

デモクラシー城の主も住みきれず
千夏

城を詠んで風刺しているのが面白いと思ふ。こうした何気なく作られた句に本当の姿があるのでないかと思つたのである。

さて以上で終ることにするが私

に作品がないことで色々言われているようだが、今こゝで申訳をする気はない。ただ真剣に作句に組んでいるのだが、発表出来るような句がないのでもう少し時をかして頂くことをお願いしたい。

次回 研究題「我慢」がまん

五句以内

七月三十日

発表 九月号の予定

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上

四〇四 清水白柳



コクヨ
便箋



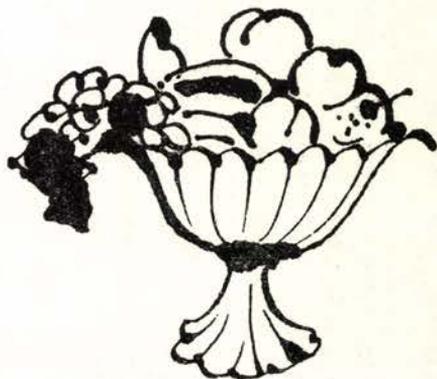
集路一

選者

選選選
方 古 田 戸
蛙 井 野 長
む さ い 菊

借り着 戸田古方選

ズボンすこしずらさうにかあう借着 愛 場
 里帰り母の寝巻を短かく着 代仕男
 ゆずっても欲しい借着を折りたみ 同
 もう次の花嫁が待つ借着ぬぐ 酔 夢
 紋付を借りて一段とひげが冴え 万 竿
 己が皮 蛇は借着の様に脱ぎ どんたく
 オール借物花嫁さんが出来上り 静 水
 あの時僕も借着と笑い合い 宗 太郎
 借着までしてはたまはならぬ義理 映 輝
 プロポーズすると打ちあげ借りた服 春 巳
 現代っ子着物借着のようにきる 正 夫
 あつらえたような借着へ元気が出 雄 々
 若妻の借着は哀れ黒ずくめ 野 迷 路



衣裳も金も借りられて感心し 雄 声
 借着着てPTAの隅に座し 秀 峰
 ボックツに小銭と鍵あり借りズボン 隆 史
 離婚した人が借ったという借着 幽 谷
 借着までした電報へ持ち直し 滋 雀
 借着した春の叙報へ輝く陽 同
 表彰をされて借着もいい気持ち 保 夫
 中央にデントかまえている借り着 八 九 寸
 制服の借着がストの先に立ち 讓 士
 よく似合う借着淋しい顔になり 千 翁
 拝謁の借着したよと古稀の弁 十 九 平
 即興へ浴衣を借りた安米節 李 朋
 借着してみても寒さが身にこたえ 古 心

五 客

お互に借着を脱いだ朝の膳 宗 義
 衣裳掛借着をぬいでほっとする 淀 月
 妹はおませ黙って借着する 章 雅

借着しておちよほ口してかしこまり 雄 声
 借着とはいえど幸せそうな顔 春 巳
 人
 休臭も一緒に借ったモーニング 十 九 平
 借着したのではない人形きれい 讓 士
 天
 生涯の最良の日を借着して 藤 波
 軸
 借着ぐらいが性に合うわたし

あせる

長野井蛙選

色あせた花へ一升瓶転び 讓 士
 色あせたズボンで停年職探しろ 亭
 色あせた写真の父と母若し 春 巳
 あせらずに落ちついてと母さとし 歌 子
 あせらずに書けと入試の子にあせり 初 甫
 他人から見ればあせりがよく判り 木 魚
 あせってはならぬ土端場踏みこらえ 晃 男
 あせってる証拠ひたいに玉の汗 杏 花
 あと五分また鉛筆の芯が折れ 宗 義
 小人の力はあるだけで尽き 幽 谷
 母だけがあせってるような適令期 万 竿
 三十に届いて娘も折れて来る 宗 義
 後妻でもいいとあせりが見えはじめ 雄 々
 同窓にミセスがふえてあせり出し 句 楽 坊

オールドミス結婚詐欺にいつかかり 雄 声
 袖の下しませうと妻があせり出し 可 住
 下積みの出世をあせる袖の下 勝 子
 四十の声聞いてボストにあせり出し 保 夫
 苗代にビニール張ってあせる村 淀 月
 モデル名に愧じないあせり鏡の汗 八 九 寸
 百姓を継がせて嫁のないあせり 古 心
 俄雨あせれど牛の歩のにぶし 同
 ふみ切りの途中でエンコへたり込み 半 月
 あせる程吃りはいいよと出 光 郎
 心だけあせて足は地につかず 正 夫
 いらだちマツチは無駄に消えてゆき 伊 津 志
 自信の目相手のあせり見逃がさず 十 九 平
 米ぬ人のあせりに冷めた夜のムード 弥 生
 交叉点あせり乗り場待たされ 信 二
 あせれども先が動かぬ交通マヒ 圭 水
 あせつたのが不覚交通事故に遭ひ 藤 波
 電話スト火事の知らせにあせるだけ たけお
 母危篤ラツシユのバスのもどかしき 光 道
 金策にあせる手形を持ちあるき 李 鳥
 妥協点見えず労資のあせるスト 同
 セールの戦果あがらぬ日のあせり 旭 峯
 マッソンであせるカンナー抜くラスト 繁 太郎
 学友のノートを借りて入院し 宗 太郎
 姑のあせりは嫁が去んだ切り 静 水
 本店へ叱られに来ておちつかず 隆 史
 席とって待ったアートの主が来ず 代 仕 男
 捜索をいらいらさせる黒い雲 涼 人

一点差の九回裏にあせる打者 句楽坊
ホルモンをこっそり飲んでるあせり 愛 鳩
中年のあせりを葉局見逃がさず どんたく
あと五分答案用紙のまだ白し 同

五 客

あせっても一生涯瓜棚作る 章 雅
八百長とも知らず本命の馬あせり 宗太郎
友も皆嫁ぎ三十路の恋もなし 滋 雀
しのびよる老いのあせりのパツクする 醉 夢
擱かもうとあせればチャンスうなまきめ 恵二朗

人

東洋の麗女にも女としてのあせり 杜 的
浪人のあせりに文相手をこまね 章 雅

天

しわ一本マダムのあせりかき立てる どんたく

軸

あせってる心を易者に覗かれる

砂

菊田いさむ選

犯人の決め手となった靴の砂 愛 鳩
関取は砂で磨いた肌を持ち 涼 人
投げ餅をつかみそこねて砂まみれ 八九寸
玩具一つない子半日砂遊び 光 郎
淀川を砂利船沈みそうに曳かれ 淀 月
トラツクの砂塵を避ける風の向き 滋 雀

骨折の足にとっしり砂袋 同

砂風呂へ話はずむ老夫婦 保 夫

砂型に鉄の湯赤く流れ込み 章 雅

足跡の砂に水湧く潮干狩 同

大平洋の波が持ち去る浜の砂 幽 谷

砂浜を添えない人とただ歩き 醉 夢

砂非情はつきり勇み足のあと 万 竿

米配所砂の苦情をもち込まれ 代仕男

砂はこり街道筋に住む苦勞 同

腰弁当ズボンの裾に砂をため 光 道

恋人の名を砂文字に書く未練 どんたく

すばしこい魚で砂だけすくあげ 静 水

砂浜で無心に足袋を脱ぎすてる 歌 子

風紋が次々動き砂丘暮れ 晃 男

砂噛んだちりめじやを値切るなり 可 住

砂熱く焼けてニコヨンの汗を吸う 同

山陰の砂丘に杖曳く共白髪 繁太郎

松葉杖砂浜ゆつくり遠ざかり 春 巳

砂噛んでちと照れ臭い勝名乗り 宗太郎

マウンドの砂が気になるジョスリー 同

観光のブームに生きる大砂丘 正 夫

砂に寝て泳ぎは自信のない水着 雄 々

夕飯の話題を変えた飯の砂 同

土砂くずれまとも汚職の噂立ち たけお

いつどこかの砂がズボンの折返し 隆 史

掘った土埋めては掘ってターミナル 同

ユニホーム今日の勝利を語る砂 木 魚

鑑識課の砂が事件の鍵握る 雄 声

法隆寺団体バスの砂はこり 同

サボテンに寝て砂まで買って来る 初 甫

生き埋めになって別府の砂の風呂 李 鳥

折箱へ砂入れ猫のトイレ出来 同

宮様もなさるか載ってる砂遊び ろ 亭

砂取場に生き抜く女の木葉髪 藤 波

砂船に浜荒されて漁夫怒り 半 月

のけ者にされて砂場の一人っ子 黒天子

砂はこり借着の裾が気にかゝり 宗 義

砂山を舞台上にロケの立廻り 旭 峯

砂浜にもつれ合うてる下駄の跡 同

横綱の踏み越しを見た砂かぶり 千 翁

砂上の楼閣に我が家の家計 杜 的

砂煙りスリルの中に売るバイク 古 心

砂噛んだギヤ熟練工あわて 十九平

砂を噛むような話へかきこまり 同

盆景の砂の掃除が日課です 恵二朗

ハマグリの砂塩水へ吐き出させ 讓 士

住

山砂をリネンで運びサボテン狂 恵二朗

観光の砂丘沙漠に来た気分 古 心

砂塚土の大根太るだけ太り 讓 士

人

土砂崩れ予算のせいにしてしま 宗 義

目に砂が這入って思案が飛躍する 十九平

地

砂丘の広さへ夏の陽が暮れ悩む 杜 的

天

柳 志 寸 言

本 多 柳 志



◇藤吉郎は知識はなかったが、智恵があった。光秀には知識はあったが、智恵がなかった。一方は関白になり、一方は逆臣になった。

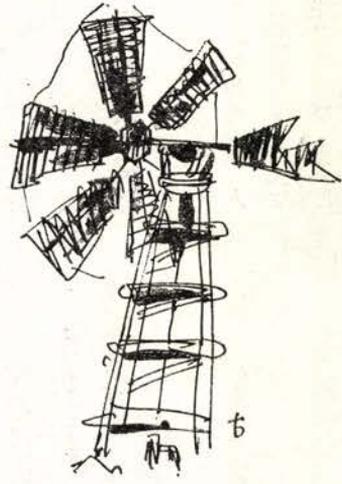
◇男を興奮させるのも鎮静させるのも女である。作家を興奮させるのも沈黙させるのもユウモアのあるウキットである。

◇くすりは凡て毒物である。毒物だからこそ効くのである。毒舌は凡てくすりである。くすりだからこそ応えるのである。

◇イミテーションの宝石で他人の目は、ごまかせても自分自身の目は、ごまかせない。盗作句で選者の目はだませても、自分自身の目はだませまい。

◇女をはめる人は女を、よく知らないからだ。悪く言う人は女を、まるで知らないからだ。川柳をくみし易しとするのは、川柳をよく知らない人だ。川柳の悪口を言うのは川柳を、まるで知らない人だ。

柳界展望



句会

▼本社七月句会は九日(金)午後六時から千日前電停東入る自安寺で開催。病臥中の路郎主幹の誕生日の前夜祭のつもりで柳友多数お誘い合わせの上ご出席、華やかな句会にして戴くようお願いする。▼七面短詩型文字クラブ柳柳部句会(和歌山市)は六月九日(水)午後五時から北ノ新地朝千馬で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)六月句会は十七日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コトヨ川柳会(大阪市)六月句会は二十五日(金)午後六時からコトヨ株式会社階上で開催。

▼大阪通信病院川柳会青葉吟行は六月二十六日(土)午後三時から京都若王寺山の家で開催。▼川稚備前支部(岡山県)六月例会は五日浜田久米雄居で開催。▼川稚岡山支部六月句会は十二日岡鉄クラブ階上で開催。▼第八回近県川柳大会(竹原市)は昭和四十年九月五日(日)午前九時から広島県竹原市竹原郵便局前森川邸で開催。兼題、出しやばり・悔い・絵本・井戸水・詠える・小屋・竿・据える・スタミナ、各題二句、席題当日一題、投句は巾四種、長さ二十一種、裏面に雅号を明記の上、投句料百円を添えて広島県竹原市竹原町中山内静水宛。

▼和気川柳会発足一周年記念句会(岡山県)は七月十一日(日)午後二時から岡山県和気郡和気町公民館駅前支館で開催。▼川柳あしなみ(姫路市)六月吟行句会は十三日(日)姫路市富士製鉄所夢前会館で開催。▼弘前川柳社三十周年、成田我洲古稀祝賀記念大会は昭和四十年八月一日(日)午前十時から弘前市中央公民館で開催。兼題、夜明け

・民謡・旅仕度・羅如・背伸び・一握り・鉢、各題三句、詠席題七題当日発表、投句は百円封入の上、七月二十日までに青森県弘前市和徳町宮本方弘前川柳社宛。▼昭和三十九年度第七回花童子賞は函館市の照井松影氏が受賞された。▼川柳こなゆき二百号記念誌上旬会(小樽市)は兼題、声・船・強い・飾る・坂・顔・続く、三句ずつ各題別記、投句料百円封入の上昭和四十年八月三十一日迄に小樽市若竹町一二九新川洋洋宛。▼和気川柳会(岡山県)発行の「たかせ舟」十号は第一回和気川柳大会号として発行。▼故前田雀郎句碑除幕式並びに記念川柳大会は昭和四十年八月八日(日)午前十時から宇都宮市馬場町二荒山神社境内、同日正午から宇都宮市栃木会館第七会議室でそれぞれ開催。

▼第九回全国鉄川柳人連盟大会は昭和四十年七月十日午前八時三十分から十一日午後四時まで広島県佐伯郡宮島町「大聖院」で開催。▼川柳にいがた五十号記念新潟市川柳大会は六月十三日(日)正午から新潟市駅前福祉センターで開催。▼蟹の目誌百号記念第十三回蟹の目川柳大会(金沢市)は昭和四十年八月八日(日)正午から金沢市山ノ上町五丁目小坂神社々務所で開催。兼題、失う・紐・太っ腹・

ごり(鯨)・体臭・女ころ・鬼、各題三句、投句は十円切手五枚封入の上、八月五日までに金沢市大衆免片原町三六蟹の目川柳社宛。

消息
▼路郎主幹は七月十日、七十七才の誕生日を迎えらる。退院以来安静を専一に心掛けておられるので、病状も薄紙をはぐように快方に向って、各地方からのお見舞いに接し、深く感謝しておられるので、この欄を借りてお礼申し上げます。

お買物は 4都を結ぶ 大丸へ!



大阪・東京
大丸
京都・神戸

▼本多柳志氏(大阪市)は六月十二日東海地方の名社古刹を訪ね、今、笠寺観音で路郎先生のご平癒を祈り、寺宝や靈験記を拝観していると、「CMは昔もあつた靈験記」の句信を寄せられた。

▼故塚越迷亭句抄と弔句抄が全国浴場新聞の五月一日号に掲載された。

▼河村日満氏(鳥取市)から、「早速のご調査ご返信ありがとうございます。この句もあつたなど聞いています。共に奈良における「師の句碑へ坂の疲れはもう忘れ」や「のほり坂天までゆけるほど歩く」などの句の抜けた事等なつかしく思い出させて戴きました。お忙しいところ

不朽洞の人々



元国鉄小部駅助役長野元一氏

真の幸福とは健康で働く職場の有ることと思う。国鉄を定退して第二の人生を駅弁に求めてから早くも十年の歳月が流れた。最初は寧ろの職業に不満や愚痴があったが、今では健康で働くことによって物心に安らぎとゆとりができ、一日一日を楽しく生きる喜びにひたっている。そして閑を見ては作句に煩わしさを忘れ、レジャーに憂さを払うて、明日を生き抜くエネルギーを生み出して行く。

職のある倅せ朝の靴が鳴り

(井蛙)

を本当にありがとうございませう。

▼木村千容氏(倉敷市)から、「八十の坂は峻しく老婆の奇禍入院に続き老生も膀胱結石にてベッドを並べる始末、ようやく五月十四日に退院、漸く家庭に静養する身となりましたが、六月誌上で師も同日に退院されたことを知り驚きました。凡人の凡筆で心からお見舞い申し上げます。」

▼工藤甲吉氏(青森市)から、「ひとまずでもなんでも退院はなんとでもお目出度いこととす。北の果てからパンザイをとえ、一日も早くご全快なされることを祈念いたします。青森は新緑から深緑へというところ。六月一日から青森空港が開港、東京から二時間たらずです。快くなられてもう一度青森へどうぞ。」

▼田垣方大氏(倉敷市)は五月十五日岡山県下川維支部連合会に湯之郷温泉へ。浜田久米雄・田村藤波の諸氏らと久し振りに会われ楽しい一日を過ごされたが、湯之郷は昭和十八年三十二才で岡山へ着任の時訪れ、旅館の女将から、「あなたのような若い方がまだ国内に残っているのは頼もしい。」とたたく酒を飲まれた印象深い湯の町で、町並みは昔のおもかげはなくなっても山の姿川の流れは変わらず心の洗われる思いであった由。

▼吉田隆史氏(神戸市)から路郎主幹の全快を祈るとのご丁寧なお見舞い状を戴いた。深謝申し上げます。

▼山田季賛氏(高槻市)は五月十二日、国鉄新幹線軌道工事区解散慰労会で城崎温泉、天の橋立

へ。同二十五日は米原まで公務でドライブ、アベベの走った琵琶湖大橋を廻って帰阪。六月六日には二十年前に入隊した桃山工兵隊跡を訪ね、高層のアパートが建ち並び、兵舎は宇治中学校と変わった平和の二十年を見届け、天ヶ瀬ダム、再建の桃山城には人間の力、金の力を感ぜられた。城崎で、「城崎の風邪を土産に持ち帰り」

▼中内学彦氏(大和郡山市)は臥龍子と改号、関学での川柳活動に力を注がれている。関学川柳会の発展を期待している。

▼河相すむ氏(西宮市)は五月末の上京に引続き、六月五日(土)故塚越迷亭追悼会に出席のため上京、六日は箱根、富士五湖を巡遊された。

▼花柳潮花氏(高槻市)は日本舞踊の師匠の忙しさに明け暮れてお

られるが、八月の三越劇場の出演、九月の御堂会館の舞台と稽古が重なって頭が混乱してしまいそうとのこと。八月の川柳ゆかた会には是非出席をされる予定であると。

▼榎紫光氏(愛知県)は富士紡績小坂井工場スパンデックス部へ栄転された。

句集

▼故川村伊知呂著、川柳句集「聴診器」が昭和四十年六月六日、大阪市東住吉区田辺東ノ町二ノ二川村伊知呂句集刊行会から発行された。生前京阪神急行電鉄株式会社大阪診療所所長の職にあった著者の三百句を集めたもの。岸本水府氏の序がある。「あくまでも望みを捨てぬ聴診器」B列5号百頁、定価三百円。

柳誌

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源藏町5 (361) 9373代
支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代
名古屋市昭和区村田町2 (88) 9069

▼「海図」創刊号が昭和四十年五月東京都豊島区集鵬六ノ一三二九森林書房から発刊された。主として川柳作品の批評を中心に、当分は季刊程度の発行として、「馬」や「森林」その他の雑誌に発表された作品を対象として取り上げられる。A5版十一頁定価送料共五十円。

電話開通

▼北川春葉氏(大阪市)の自宅に電話が開通した。
大阪(九五二)五八三九番
転居

▼榎紫光氏(愛知県)は左記へ転居された。愛知県宝飯郡小坂井町大字伊奈 富士紡績南山寮内。
住所番号変更

▼山田季賛氏(高槻市)の住所の名称が左記のように変更になった。
大阪府高槻市西五百住町十一番二十号 幹線アパートB一〇二。
▼高須嘸三味氏(東京都)の住所の名称が、七月一日から、東京都港区西新橋十丁目二十二番二号、と変更になった。(薫)

いのちある句を創れ



投稿規定
用紙は原稿用紙
文字は正
確
締切毎月十五日
投稿先
本社宛

本社 六月旬会 (大阪市)

6月7日 午後6時
会場 千日前 自安寺

既に梅雨に入ったと云う測候所の予報を裏切る、好晴に恵まれた六月の本旬会は、いつもの馴染の顔のほかに、追い追新人の進出が目立って来たのは、大いなる喜びである。

本日の柳話は何方ぶりの戸田古方氏、路郎先生最近の作品を引用され、日ごろの含蓄を披瀝された。

次いで席、兼題の披露に移り、各題秀句中より、叟乃先生が、天の天を遊ばれた。その結果、本月の不朽酒杯は、ベテラン本多柳志氏が獲得された。

最後に、若本多久志氏より、路郎先生其後の病状経過報告あり、一同一日も早きこ快癒をねがう、散会九時過ぎ

(静馬)

出席者 叟乃、瓢太、四郎、よしを、千香、吸江、古方、多久志、すみれ、千代、一栄、清子、好郎、昭三、いさむ、素郎、与呂志、女、一舟、井平、市郎、水京、白柳、野菜、花梢、竹荘、慶之助、清人、舟遊、白溪子、たつみ、静歩、双葉、弓彦、圭井堂、静馬、金三、滋雀、文秋、柳宏子、誓二、柳志、句菜坊、有

子、梅里、春巳、良、みよ、いわを、正彦、稔夫、葉、みさ子、呂久三、孚彦、宏子。

兼題「慌てる」 清水白柳選

慌てたか鍵を忘れて戸閉める 喜仙
混浴を総立ちにさせ震度四 章雅
飛び起きた休日の朝をくやしがり 千夏
お刺身にソース今更慌ても 野迷路
電報の声にシャッキリそれっきり 市郎
大捕りに跳足のままとんで出る 圭井堂
階段を二つ股いだ発車ベル 市郎
馳け上ったホーム反対の汽車に乗り 多久志
発車ベルジュースにもせな慌てよう 清子

慌てない方が上手に席をとり いわを
腹痛へせきも慌てもせぬ注射 花梢
梅雨寒に慌てた蛙風邪を引き 句菜坊
焼け落ちてから慌ても始まらず 圭井堂
帰ったら双生児でおますに慌てだし みよ

修養が足らんのかいな慌て出し 古方
夜の蜘蛛不意の明りに逃げてゆく 孚彦
晩婚を問われ返事にちと慌て 昭三
素人を慌てさしているアンコール たつみ
粹人もわが娘となれば慌てたり 八郎

あわてまいことが一日とり遅え 葉
ユーモアで慌てる大人落ちつかせ 一舟
赤ちゃんはどこから出るに母慌て 多久志
月末になって職人慌て出し 金三

失言が活字になってから慌て 柳志
慌ててるソロバン二回とも慌て いさむ
パバとなる日を慌ててる若さなり 清人
落付けばちんば履いてのに気がき 井平
何云うているのか解らぬほど慌て 白溪子

ハンサムの視線に慌ててみくすヒッ 女
慌ててる足へスリッパもつは向き 春巳
結局は慌てただけで乗りおくれ 白溪子
慌ててる証憑に子供間違える 舟遊
慌てても医者待合気にしてす 弓彦

思いたし笑いですんだ慌てよう 花梢
慌ても一円四の釣銭は読み 四郎
もう一寸慌てて欲しい聴診器 素郎
手に持った物を探さすほど慌て たつみ
良心の苛責さすがに眼が慌て 梅里
慌てると見られたくない煙草の火 柳宏子
慌てや叱られ落付きや邪魔にされ 柳宏子
血圧を気にして火事を慌てない 柳宏子
慌ててる日の信号が長すぎる 清人

兼題「慰安」 西尾葉選

慰安どころかバスに酔い船に酔い 良
敗戦秘史慰安婦のことにふれ 多久志
慰安バス奈落の底へまっしぐら 双葉
慰安会飲み足りないのが南北 女
慰安するつもりが喧嘩して帰り 白柳
老父母をねがう有馬の湯があふれ 静馬

慰安会僕の故郷を通り抜け 春巳
詰めるだけ詰めて町内慰安会 野菜
気休めに来た温泉のぬるいこと 静馬
慰安会社社長早目に座を外し 文秋

小女心ささやかながら駅に花 八郎
寝るだけを慰安と思う年になり 喜仙
せめても寝溜めがしたい里帰り 素郎
三日月の慰安を先き寝させ 好郎

グロッキーになって慰安のバス帰る 吸江
斗病の慰安白衣の国訛り 吸江
団体にならぬ小さな慰安会 白柳
漫才と浪曲でよし養老院 一栄

慰安してくれるはずが先に酔い 春巳
慰安会の戻り見舞に来たベッド 昭三
本日の慰安シーツを妻に連れ 舟遊
思い出は母へ慰安の文楽座 吸江

婦人会慰安旅行の衣裳見せ みさ子
宣伝も兼ねて市場の慰安会 柳志
町内の慰安は母と妻を出し 野菜
慰安旅行デスクは話せる人だった 舟遊

先輩がこまめに回る慰安会 昭三
慰安会それからただの仲でなく 多久志
施設慰安選挙の近い匂いする 柳宏子
株土地に乗りかえ涼しい顔でいる どんたく

兼題「株」 傍島静馬選

株買って売ること知らぬ素人なり 喜仙
株持っていて今日まであった金 黙平
株にしておいて今日まであった金 黙平
なにがしの株を日虫眼鏡 八九寸
持参金の株値上がりで鼻高し 野迷路
株少し持って夕刊待ちかねる 一栄

妻や子が株主という会社 好郎
株下落妻ヘソクリのドロをはき 正彦
底値では買えず天井で売れぬ株 文秋
配当がへったと二号淡い顔 みさ子

紙くずの株しまうのに大金庫 稔夫
名前だけ借りて会社の株組織 一栄
遺言は株と女に手を出すな 多久志
株に懲り小豆に懲りて今は釣り 圭井堂

食うてチヨンに株が上るうが下るうが 清子
儲かると信じて買った株なのに いわを
暴落へ葬式金まで注ぎ込んで 千代

黒田節庵のお株をしてやられ 春巳
天井で買われ底で売れ飛はし 梅里
成長株ボール拾いで消えてまい 良
切り株のどこ迄弁当喰べに下り 金三

半分以下でもやっぱり持ち続け 静歩
門番をしては株主とも見えす 竹荘
この頃は株屋の新聞とんと来す 葉

BG三年目自社株も少し持ち いさむ
あれほどの株気遣いがもう云わず 圭井堂
動かない株は女房の名にしとき 多久志

遺言をまもった株が只になり 千夏
母娘して芝居が見れる株を持ち 柳志
株不振セルス自動車に乗換える 静馬

兼題「襟」 水谷竹莊選

入試バス詰得意金ボタン 繁太郎

遭難の夫を送る白い袴 どんたく
 袴先きを気にし話も落ちつかず 黙平
 靖国で袴を正して息子を語る 千夏
 たまに着る和服の袴へ母の指 弓彦
 足音へ袴を正した応接間 清人
 広袴を着こなす胸に見るゆとり 一栄
 神城の静寂袴を正す 朝柳宏子
 婦人服袴にデザイナ一の腕を見せ 一栄
 皇室に袴を正して年が知れ 文秋
 新入社袴を正して聞く訓示 静馬
 袴替えて来ても夫は気がつかず 柳志
 酔うた手のシャツ袴足から這入り 梅里
 袴元を子のなすままにひろげさせ 美代
 袴当ても昔のまんま故郷の母 圭井堂
 番号で呼ばれて女囚袴を見る 梅里
 袴はだけ乳房含んだ子の寝顔 よしお
 袴足のきれいだころは舞妓はん 千香
 お祓いへ袴を正してかしまり 市郎
 事務服の袴も揃いのお年ごろ 金三
 すつきりとした袴足に過去があり 多久志
 袴垢を見てから恋の熱がさめ 多柳
 大学二年もう詰袴がいやになり 多久志
 湯上りの袴に色香がまだ残り よしお
 袴を正してバスから押んどき 舟遊
 袴足を刺ってやるほど男惚れ 好郎
 花嫁になる袴足を白く塗る 静馬
 突き袴に昔の癖がまだ残り 圭井堂
 袴元は粋な育ちの京なまり いわを
 折れている袴を直してあげる仲 古方
 袴を正して嘘ついてくる いわを
 一代の儀式に袴を正す席 金三
 荷飾りで見えた豪華な縫の袴 金三
 京舞妓可愛い袴足のぞかせて 水京
 信じる夫の袴についた紅 吸江
 抜き袴にむかしの色香まだ残り 水京
 ウインドにうつる姿に袴合わせ 水京
 すり切れた袴に苦勞の影を知り 吸江

詰袴を脱いで彼女に会いに行き 静馬
 半袴のじみな苦勞に手を合わせ 静歩
 袴足の垢を他人に見付けられ いわを
 袴元をはたく床屋に目をさまし 滋雀
 袴首をつかんでデモのゴボウ抜き 弓彦
 白い袴かけて目出度い日が迫り 白柳
 抜き袴のくせが素人とは見えず 竹莊
 席題「一目惚れ」松江梅里選
 一目惚れするよな顔に出くわさず 一栄
 亡き妻にどこか似ている一目惚れ 清人
 一目惚れしたとシャツを弾んどき 竹莊
 一目惚れしてから白髪気にかかり よしを
 一目惚れさす気のせいがまた建たず 好郎
 一目惚れ合性なんぞ云うとれず 野菜
 パチ物で一目惚れしてつかまされ 句楽坊
 オールドミスに一目惚れした変わり者 いさむ
 一目惚れしたと十代悪るびれず 清人
 人柄へ一目惚れした娘の手柄 市郎
 一目惚れなじめぬのれんもくらせる 良
 いい歳がカツとのほせた一目惚れ 多久志
 一目惚れして先輩の世話になり 柳志
 一目惚れ帯の柄まで覚えて来 柳志
 コンタクトレンズとは知らなかつた一目惚れ 菜
 一目惚れ黒子の位置をよくおぼえ 同
 一目惚れベタ足までは気が付かず 素郎
 一目惚れ礼はタンマリする云う 金三
 一目惚れ上手に捌く腕を持ち 井平
 一目惚れ曲り角までついて行き いわを
 一目惚れしたホステスにヒモが居り 静馬
 一目惚れしたわと仲間酌きこぼし 市郎
 一目惚れする客と見込んで奥へよび 吸江
 一目惚れして七十に手が届き 井平
 ガッチリと貯めてるうき一目惚れ 静歩
 一目惚れいっしょになつて敷かれつめ 静馬
 二次会へ行く約束の一目惚れ 竹莊
 一目惚れでとスケスケ云うテレビ 柳宏子
 初恋に似てたばかりの一目惚れ 一舟

一目惚れ下車したバスは終わった 野菜
 ネットイが波いと変な一目惚れ 稔夫
 一目惚れぐらいて一生約しかね みさ子
 一目惚れネッソのためと気がつかず 好郎
 一目惚れそれから不伴五十年 一舟
 荒れた手へ母親の方が一目惚れ 好郎
 一目惚れ高嶺の花と見て戻り 柳志
 一目惚れ日日夜夜いやになり 梅里
 席題「コップ」本多柳志選
 コップから採れた指紋でホシが割れ 多久志
 云うだけを云うて酔えないコップ酒 花梢
 招待に遅れコップについて呉れ 滋雀
 紙コップ旅を楽しむものにする 文秋
 コップ又半端になった派手な音 一栄
 コップころる敷場の梅雨はまだあけず たつみ
 新世帯コップの柄も揃つとり 弓彦
 コップ酒どうにか家へなり着き いさむ
 検尿のコップいやらしそに持ち 多久志
 ビルホールコップにもあるコマシヤル 吸江
 乾杯へ下戸もコップを持って立ち 清子
 平凡な暮し今夜もコップ酒 昭三
 残り酒幹事はコップでかき集め いさを
 お手前のようにコップを持つ仕草 静馬
 アルサロでコップの紅を嬉しがり 清子
 コップ一杯明日もやる気の保安帽 稔夫
 水中花コップの水に生き替わる 舟遊
 乾杯のコップ目よりも高くあげ 金三
 訥辨の矢鱈コップの水に触れ 静馬
 栓抜きが迷い子でコップ持て余し 圭井堂
 コップ酒今日も政治の花が咲き 誓二
 二杯すんでコップに代る酒 柳宏子
 着くまでは待つて居れない紙コップ 文秋
 指紋とる筈のコップに手をつけず 圭井堂
 コップ酒ついた運に捨てた運 市郎
 地下足袋にこぼしてならぬコップ酒 梅里
 乾杯のコップへ義理の手が揃い 稔夫
 おでん屋で左遷を送るコップ酒 柳志

席題「建売り」菊田いさむ選
 建売りへ二号らしいが下見に来 多久志
 建売りを退職金に足が出る 多久志
 建売りをハイキングの道ついでに見 与呂志
 建売りへ先ず目をつけた新聞社 昭三
 駅まで五分建売り値が合わず 金三
 投売りになつて建売りやつと売れ 柳宏子
 建売りの一番はしが先に売れ 市郎
 表てから見れば建売りとは見えず 稔夫
 建売りの前で落ち合う共稼ぎ 柳志
 甲斐性なし建売りなんかとけなし 弓彦
 建売りを一度見に行く妻を連れ 四郎
 建売りは自動車置けぬ巾由出来 吸江
 建売りに地主があけてる大敵い 白柳
 抜ける行手を抜き建売り出来上り 圭井堂
 建売りへ旦那が出したあたま金 清子
 建売りの強気交通の便がよし 梅里
 ブルドーザー傍に建売りの案内所 清人
 建売りの間取りは昔のままがよし 野菜
 建売りにゴールイン急いだ二人 井平
 建売りは焼場の煙がそばに見え 宇彦
 建売りを買っただけくれた退職金 誓二
 建売りの便所気になる位置にあり 稔夫
 建売りの棟上げ瓦持つかいな 春巳
 建売りの半分で建売りやつと売れ 圭井堂
 淡路島見える建売り自慢する 柳宏子
 建売りのなるほど便利な台所 静馬
 建売りのごまかしによし新建材 舟遊
 建売りはうぐいす張りの音がする 文秋
 キンカンと風呂場に建売りを念入れ 梅里
 建売りの間取りおなじ陽が当り 静馬
 白溪子
 川維 阿倍野支部句会 (大阪市)
 金井文秋報
 あの人に似ているタイプへ振りかえり 梅里
 逃げ口上しまいは笑いでほかしとき 良

子には子のめあてがあつて金を貯め
 伏る段になつて伎手のない巨木
 日曜の朝の目覚し当てがあり
 珍しく一本つけた妻の肚
 目的は一軒ほしい共稼ぎ
 コマーシャル老母には富山ほど効かず
 窓の風とめてタイプに汗を打ち
 絵のようになくは落ちぬ蚊遣り香
 伝説を素直に聞いて旅たのし
 鼻薬効いて万座で一人もて
 大切にもしれず養子のように動き
 試供菓飲むだけ飲んでほつとかれ
 じわじわと効き目が見える頃出かけ
 目的は死でないはずの山登り
 逃げるだけ逃げてアッパ子の喧嘩
 親よりも大事な人に裏切られ
 目的の額まで妻は働く気
 タイプより値段でうける中古品
 効き過ぎてうろたえている六十年代

柳志 圭井堂 小松園 滋雀 文秋 静馬 章雅 金三 野菜 双楽 一栄 静歩 白柳 章子 正彦 万里 幸子 佐野 士朗

編笠の三味へ白雪落付けず 六童子
 割箸でつままれ毛虫うろたえる 白柳
 踏みつけてまだ腹のたつ毛虫 金三
 ロードショウ先着順のひまな顔 静歩
 走りあいいくつになつても競いあい 正彦
 メーデーの列を横目で町工場 滋雀
 メーデー歌うちではママの骨休め 半月
 メーデーに参加を祖母はまだ嫌い あいき
 メーデーを愉しんでいるのも若き 柳宏子
 悪友と別れを惜しむ新任地 功
 転動へ飲み屋銭別兼ねて来る 静馬
 嫌だとは云わさぬ辞令の威圧感 三時
 土地の勝手判った頃に又転動 一栄
 転動をバーのママへ先ず知らせ 章雅
 見送りの数栄転でないらしい 市郎

評判に自惚れていて嫁きおくれ 一舟
 栄転と判る笑顔で別れて来 良
 評判を気にもしないで宵化粧 すみじ
 世辞気にしてはられない女秘書 風仙洞
 評判が二人を無理に結びつけ 文秋
 候補者の評判ここでは又違い 良

レジャーチーム一家そろつて押されに出
 押して見る力が出来た乳母車 よし坊
 砂を手に遊んで故里がない 極堂
 タンプに積まれた砂の水が涙となつて散る
 砂遊びの子の手小さき夢つくる 白史
 白砂と少年の啄木を知らない指 ゆきら
 満腹のくちはしばし次は文句となる 司郎
 さうやろうと思ふていたあいつの嘴 鳥雀

入学の今日から春を感じさせ 良江
 新入学先ず交通のルールから 君子
 入学へ残業腕によりやをかけ あきら
 浪人をして入学がいやになり 美男
 入学の祝の膳に鯛がつき 静女
 未っ子の朝寝が入学してなお 一声
 下宿代値切つて毎日腹が減り 胡風
 春風が下宿の窓にさそいかけ 宗義
 書留の代りに父が来る下宿 鉛坊
 下宿屋のおばさん国の母 芳月
 母からの小包がつく下宿先 伊久野
 下宿まで尋ねるほどの仲であり 正洲
 大望は捨てず下宿の灯は消えず 久米雄
 下宿する部屋の畳を踏んでみる 謙士
 春風に野球のボールもよくはみ 水仙

同情は同情記事は出づられず 魔花麗
 金力で汚職の記事も加減され 浅太
 落ぶれて友の出世の記事を読み 紅茶
 日系の誉の記事へ胸を張り あき坊
 暴露記事若しやと痛む妻の胸 快夢起
 また例の提灯記事かとも目もくれず 同
 リバイバル切抜記事も甦り 万里歩
 世の移り東西紙上の暗い記事 押山
 楽隠居株の記事から先に読み 浮葉子
 値にふれて記事は拝啓首相殿 雪女
 教え子の出世の記事へ誇り見せ 泉水
 長生をして新聞の記事にのり 内海
 鼻かぜも首相がひけば記事にされ 柳葉
 簡潔の記事新米は長く書く 同
 夢語り茶飯事となる宇宙記事 蒼蛇様
 足で書いた記事真実盛り上り 蒼蛇様
 ストの記事訪日団の気を採ませ 紅溪
 ゆする気て記事にのさめる週刊誌 三石
 真相を秘めた記事だが黙認し カロ女
 筆不精尻切トンボの記事となり 晚舟
 そこ迄は書くかと一応記事を止め 同

子供部屋エプロン白き母の図画 生郎
 子供部屋只今面会謝絶なり をさむ
 テーマンジャズも聞える子供部屋 孝
 子供部屋親のせりふを真似てる 枝葉
 子供部屋建てて子も好し親もよし 八陣
 母が来て窓しめきつた子供部屋 可住
 精薄に親懸命の子供部屋 青翁
 アパートに住み子供部屋ない悩み 与志
 新築に大掛軸がうれしくて 志げを
 新築の棟に末広金延びる 寿栄
 村中を見おろすように家を建て とんち坊
 新築の夢なり故郷の親を呼び 初音
 新築を夢見る丈けのわが住居 村雨
 新築の窓からもれる祝いうた 実世
 新築のこんな余生を夢に持ち 青峰
 新築に新婚愛の渠をつくり 梅枝
 新築のビルへ美人もすいこまれ 千草
 国道ヘナンバーワンの棟を上げ みるる
 新築の風呂は六甲見てはいり 無鬼

養子又妻に禁酒を誓わされ 吞洋
 浜口も佐藤も養子とすすめに来 松風
 女房の尻に敷かれたいい養子 十面子
 真面目さを養子のせいにしてしま たくし
 何にもかも忘れて今日の慰安会 房江
 忘れまし明日はあしたの陽が昇る 昌雄
 お化粧も忘れほんやり失意の夜 蟻蛇
 大安のまだ温みある貸衣裳 勝子
 人伝に聞く消息の不倅せ 大破
 新入社月賦一号の背広着る 古城
 彼岸花勝つてくるぞと征つたまま 紅雨
 酔えば足る酒を花まで行かす春 夢生
 儲け口持つて来る友に金がなし 未遂
 うたた寝がとまるころ聞いていた 是江
 冷然と医師重大なことを言う 桂緑

京都支部句会 (京都市)

備前支部句会 (岡山県)

大聖寺支部句会 (石川県)

屋上のビルがうまくなる入陽 紅鳥
 入陽時出かける人と帰る人 市也
 雲に押されてる母と子の歩み 亀一
 ヘル押しした手おぼらばらに酔いつぶれ 次郎

入学式ねぎ坊主の様子は並び 静子
 入学の発表涙の目もまじり 鼓山
 入学へ定年のふんどししめなほし 幸仙
 制帽が坊主頭に大きすぎ 知水

喰うたけに喰つて無口のおいと立ち 味平

両親の不和がいつしか子の無口
 文楽は無口の芸にほろり泣き
 緊張が皆を無口ににしてしまい
 無口の一言へ座はシュンとして
 アベックの一言で煙草の火を借りる
 名案もうかばず煙草ふかすだけ
 もう一本吸うたら帰ろう待合せ
 父ちゃんはいんせいでいよりか出せせず
 煙草の輪吹いて朝寝の床を出る
 道訳くにまだあるたこ一つ買
 煙草さえ喫まれぬ婿で好かれる

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

ビールの残り寄せて夜桜飲み直し 清 夢
 夜桜のビールへ妻も酔い心地 芳 子
 商談へビールしきりに泡を立て 清 泉
 ビヤホール若さと若さ乾杯し 昌
 ビール腹ドカツとすえた社長椅子 駄句案
 台所母の匂いがしみており 清風子
 十代の匂いツイストむせかえり 加代
 今宵又妻の匂いと別な味 勇
 警察犬脱獄囚をかいでゆき 正夫
 女連どつと匂いを室にまき 明朗
 ほんぼりて逢えは無理矢理酒の席 輝水
 ほんぼりの灯へほんのりとほほを染め 信夫
 大声でほんぼりを読む千鳥足 一郎
 ほんぼりに今宵の母の若く見え 孝華
 ほんぼりへ妻と歩めば寄りかかり 綾美

川維 宇部支部句会 (宇部市)

安平次弘道報

コレセット肥大を装う身のつらさ 一考
 美味いもの遠慮をしてもまだ太り 南風
 太りすぎ空いた席にも気兼ねをし かつ子
 太る程やせた亭主をよく使い いさ夢
 身代が太って親族よって来る しげる

川維 大鉄支部句会 (大阪市)

辻白溪子報

のんびり屋の癖に熱い風呂が好き 杜的
 一つだけきれいな想い出のベッ 飛鳥
 無神論は本人だけの受験前 万的
 ひと思の海女の嫁を観光船で聞き 耕三
 受験子へ知らさず祈る父であり 宗悟
 ひと呼吸待つてもやらデインタビユー 求女
 看病の窓は手頃の幅にあけ 白溪子
 お祈りが済んだ正座で意見され 水断

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

この針へ生涯かけた丙午 宏子
 針にさえ命ある如し仕立職 圭水
 計算の不足は雑費として落とし 鳥荘
 精算書御札の云った分も戴り 句念坊
 精算をしますと遺書に書いてあり 和郎
 精算をしようとはきついで別れ 貴山
 精算をせねば気になる生まれたる 圭水
 精算の何十億はピンとこず 摩天郎

丸紅川柳会句会

村田瓢太報

にせもの知って家宝の柿右衛門 巴香
 ほめられてみてにせものに冷汗かき 美幸
 にせものの花の方が高くつき 幸
 花売場これもニセかとそつとふれ ときえ
 白魚の指にかがやくニセダイヤ 瓢太
 あまりほめるのでにせものとは言えず 泉陸
 にせものと承知ではめる下心 立児
 気前よく買らば知らず買ひ 好郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

ねてる子を起しあれこれかまひ過ぎ 半月
 甘えられ別れ話は言ひそびれ 水美
 女流候補泣いてあまえて壇を降り 東雲楼
 長思い妻も甘える術を知り 摩天郎
 賢夫人と呼ばれ甘える人がなし きはち
 議論好き甘えてあえる人がなく 美代
 銀行へ甘えていたが落度なり 白柳
 待合いの二人の恋はもえさかり 紅月
 あそこで来た、それだけで通じ合い 吸江
 待合せ五分おくれて行くときめ すみれ
 待合をシェアア〜ととて女でる 古太郎
 今日からは妻と身を待ち合せ 花梢
 待合へなれた二人の入りよう 美房

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

円満に円満にと騒ぎたて 万利
 反対論一人ぼっちにされており ゆきを
 実情に負けて反対押し切れず 双来
 借る見込みついて晩酌の過ぎ 尤三
 お流れを頂戴します 旭世術 百酒
 ホーナスは質の流れに間にあらず 静歩
 三度目は結納すんでから流れ よしを

城北明老句会 (大阪市)

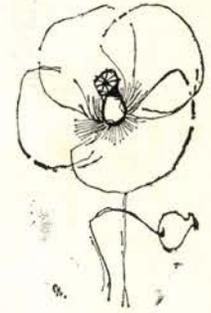
田中多幸報

あっさり水に流せぬのもおんな 慶之助
 おめでたと背を叩いて母子手帳 弓彦
 打診して脈がありそで口説いて見 梅里
 円満にした気で仲人帰えって来 好郎
 二合瓶開幕ベルに注ぎこぼし 素郎

派手好きな妻は借着が良く似合い 芳
 姉さんの借着で末の娘見合する 源川
 借着して今日一日はおひな様 久子
 菊の借着で人気呼ぶ菊人形 ひさえ
 晴れ姿上から下まで借で行き 一登
 見栄はれど借着の紋はかくされず 多幸
 借着して行儀のよさが目立て来 柳生
 借着して横のたばこが気にかかり 生仏
 新郎のカウスの出すぎ気にかかり 濁水
 媒妁も借着も馴れてるお仲人 繁子
 二女もまた借着衣裳でとつき行き 清江
 又今度借着で写真銀婚式 富士
 借着して気をもみ乍ら花見酒 一休
 とむらいの親子で借着紋違い 行生
 借着の当って出席の返事する 弘生
 日まわりの様に借着の主かわり 充弘

宴会・出張パーティ・折詰弁当
 梅里ノ店
大萬
 料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 TEL (六三三) 三九三五番
 (六三三) 七七八二番
 館の店 アベノ橋近地下食通街
 TEL (六三三) 〇一四七番
 串の店 南区豊屋町三ツ寺センター
 TEL (三三三) 九一八四番

柳樽室



★梅雨季の気候は降っても照っても蒸し暑い。退院後の路郎は入院中と同じように安静が必要なので病床に横たわったままである。

位の辛抱はまだ序のくちと心得てよからうと自分に言い聞かせている。★最近花好きの私

嫁が数日置きに、グラジオラスや、黄菊や、霞草や、芒や、姫百合や、菖蒲などを次々と替えてくれるので、病室はグリーンハウスの出張所のようなのである。★安眠をしようと思えば、いつも頭をからっぽにしていなければならぬ。かりに眼を閉じて映画の場面を思い浮かべようとすれば、必ず眼の筋肉は緊張するのである。

何でも頭のちよっぱなでやかましく鳴っている。君が代が響いてあとがシンとなるまで。★私の願望が届いて皆様が次々と筆をとって下さるのでありがたい。石曾根民郎氏の「信濃の峠」は頼りに信州の旅を思わせる。東野大八氏の「江橋の

ちに地震がおこる。雨が降ったら土砂くずだの洪水だのおびやかされ通してある。乳と蜜の流れる地を求めてもそこで水住する事の出来ない国籍を持って

★降り出したら大雨になって困らせる今年、梅雨ながら、各支部では盛んに青葉吟行が催されています。★献身的な腹乃先生のご看護に、食慾も進みをみせられたと言え、黙々と養生される主幹の腫は、まだまだ重い。気永にご養生を祈るばかりです。

★本号「不朽洞句帖より柳話」は、路郎主幹が、その昔松阪クラブ川柳講座の指導もされておられた時代から、師事されておられる古方先生だけに、主幹の川柳生活川柳精神を、惜しみなく筆にされて、読む者になにかを残されることと思います。★阿達義雄教授の送稿がおくれましたので、次号掲載の運びとなりました。お待ち願

います。現代柳人録も本号は休載させていただきました。★第二回川柳ゆかた会が近付きます。一年に一回の柳宴です。ご遠方の柳人もお顔をお見せ下さい。久し振りの握手を楽しみにしています。編集局は皆さまのご支援に張切って、がんばっております。尚一層ご支援のほどお願い申し上げます。(安子)

★川雑支部句会 七月

★かがみ句会・2日(金)一時、題、血圧・後味・金廻り・呑み込み・面当て、所、池田古心居、★竹原句会・4日(日)、題、物音・汁・末っ子、所、山内静水居、★玉造句会・

募るを広告見中夏歓交人柳

川柳雑誌社

- 八月号へ
- あなたの暑中見舞広告を
- ★一口金三百円。幾口でも申し込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は七月五日着便。
- ★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

この時は頭の先でラヂオが鳴っている。此場合ラヂオは考える働きを邪魔する機械になっているのである。シャンソンごされ、ジャズごされ

もいささか経済も考え、香港フラワーを愛用していたのだが、路郎の退院後は、二男の

梨花」は戦後の今日も、なお生々しい思い出の記となっている。★アンケートの「私の誕生日」は回答者が約半分であった。すでに故人となつている人もあるので淋しい事である。★日本は、あちこ

10日(土)六時半、題、川・星・夢、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★明和研究句会・11日(日)一時、題、茶漬け・光・仲間、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★南海電鉄句会15日(木)六時、題、助役・保険・アライ、所、雑波高架下親和クラブ、★京都句会・16日(金)夕、題、鋭利・煽る・鮎、所、上京区相国寺北門前上ノ町田中鳥雀居、★阿倍野句会・20日(火)六時、題、おやし・からくり・のら・たばこ、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大萬、★富田林句会・11日(日)一時、題、蚊・嘘・好き、所、富田林公民館

大和文華館

口ピロから静かな大和路が寛わたせ、中庭の青竹が目をやすませる。大和文華館は、めぐまれ環境の美術館です。絵画・彫刻・書道・陶磁・漆工・染織など、国宝や重要文化財を多くを逸品を集めています。春秋には特別展も開かれます。(月曜休館)近鉄奈良線・学園前駅すぐ

大和文華館

大和文華館

大和文華館

大和文華館

大和文華館



あなたの句帖として

ご利用あれ

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいて
います。句会でお使いになるなり、抜けた句
の整理にお使いになれば、何冊かで、あなた
の句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に
句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円(送費二〇円)

大阪住吉区万代西五丁目二五

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪(七五)6081

振替口座 大阪七五〇五〇

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の
がなかなかうがって、一気に
読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年か
ら川柳を手がけているというから
川柳歴はもう六十余年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載され
ものを中心にその他の雑誌や句集
からひろった五百六十三句につ
いて、ひとつひとつ丁寧な注釈を
加えて、鑑賞の手引に資そうとし

大阪住吉区万代西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(七五)六〇八一

振替口座 大阪七五〇五〇

C・M・C 児童音楽サークル

バイオリン・ピアノ・声楽・チェロ・特設バレエ科

千林教室

大阪市旭区北清水町九六

北清水集会所 バイオリン科

あびこ教室

大阪市住吉区南住吉四ノ一

あびこ幼稚園 バイオリン科 電話1874

西九条教室

大阪市西九条

防犯会館 バイオリン科 電話9836

生駒教室

奈良県生駒町北新町

文化会館

生駒2027

指導 麻生アート 外教氏

★サークルに関するお問い合わせは下記へお願いいたします。

奈良県生駒町生駒本町103 電話生駒(〇七四三七)二〇二七

主宰 麻生アート

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

釣 小西無鬼選

植 吉田圭井堂選

木 工藤甲吉選

説 若本多久志選

盆 おどり 山根白星選

停 電 石倉旅風選

牽 每号募集

近作柳樽 麻生路郎選

方 柳塔 川村好郎選

川 柳塔 麻生路郎選

文 章 (評論・研究・感想其他)

投 稿 規 定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」「方田帖」は誰でも投句が
▼ 「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第七十号

定価 一、二〇円

(送料六円)

(禁転載)

半力年 七五六円(〒共)

昭和四十年六月廿五日印刷

昭和四十年七月一日発行

大阪住吉区万代西五丁目二五番地

編集長 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(七五)六〇八一

振替口座 大阪七五〇五〇



なんば橋本
日本橋
四
大阪・東京・京都
高島屋

何をを選んでいただくか
は先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和四十年七月一日発行 (毎月一日一回発行)

編集兼
発行所 川柳雑誌社

編集兼
発行所 川柳雑誌社

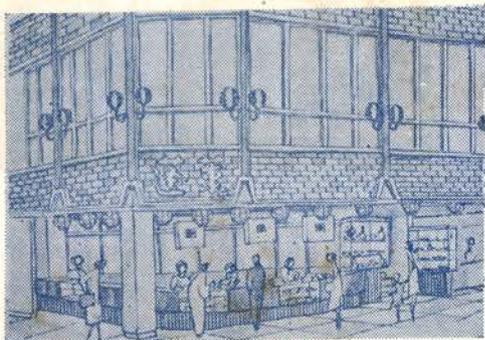
川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地 電話大阪(671)〇八一

長崎口座大阪七五〇番

定価百二十円(送料六円)

豚饅・焼売



広東料理

蓬菜

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店

新鮮・清澄・軽快・純正
洗練された味と香り



青年のビール

サントリービール



Toray

東レイトロン
レインコート

EASY CARE / 手のかからないせんい

東洋レーヨン株式会社

南紀の旅は なんばから

▶白浜ゆき◀

準急第2きのくに… 毎日… 12.43発

準急臨時しらはま… 土曜… 13.10発

▶新宮ゆき◀

準急南紀1号… 毎日… 7.35発

準急南紀2号… 毎日… 16.40発

夜行直通列車… 毎日… 22.07発

・準急第2きのくに号は 座席指定券を発売

・他の列車はなんば駅で 座席整理券を発売

お問い合わせ

(641) 8686

南海電車